『痕、婚、』（リーディング用台本）

作・原田ゆう　演出・シライケイタ

登場人物（登場順）

石崎友久	石崎洋服店の店主、喜久枝の父　四十代	いわいのふ健
石崎喜久枝	友久の娘　二十代前半	飯田桃子
大島武晴	石崎洋服店の職人　三十代	山﨑将平
木下麻子	裁縫職人　三十代	山﨑薫
金澤順平	小説家、和子の夫　四十代	筑波竜一
大木健蔵	新聞記者　三十代後半	阪本篤
佐伯陽太郎	在郷軍人、荒物屋店主　四十代	シライケイタ
川上りゑ	石崎家の隣人、醤油屋　三十代	中村美貴
塚田次郎	石崎洋服店の元職人　二十代	相川春樹
金澤和子	教員、順平の妻　四十代	林田麻里
徳留篤郎（とくどめ）	出版社勤務　二十代	原田ゆう

時代

一九二五（大正十四）年、春の半ばから夏の終わりにかけて。

場所

東京、下谷区のとある町、商店が立ち並ぶ通りにある、石崎家の住居兼洋服店（石崎洋服店）。

舞台は、その石崎家の居間と庭。

居間には大きめの卓袱台、それに合わせて座布団がいくつか置いてある。上手に仏壇が置かれている。その脇に箪笥も置かれている。

縁側は居間に合わせて横に伸びている。

居間に面した庭があって、近所の知人らは庭づたいに訪ねてくることがほとんどである。

居間の奥に廊下、廊下の上手の先は、台所、便所に通じている。廊下の下手に階段があって二階へと通じている。

廊下の下手の先は住み込みの職人たちが使用している部屋に通じている。

廊下の奥が洋服店になっていて、帳場、アイロン台、ミシン台、裁ち台がある。その先に土間と店の玄関がある。

ただし、居間と洋服店は廊下の障子戸によって遮られており、洋服店と玄関は、客席からは障子戸を開けた時に垣間見える。

①

一九二五年、春の半ば、夜。
石崎友久が縁側に立ち、屋根の方をうかがっている。

友久　……。

石崎喜久枝が台所からおにぎりを盛った皿を抱えて現れる。

喜久枝　三角にならなかった。
友久　え？
喜久枝　おにぎり。
友久　（おにぎりを見て）ああ。
喜久枝　もう。
友久　あいつも下手くそだったからな。

と、友久はおにぎりをとる。

喜久枝　じゃあ、お母さんのせい。
友久　（おにぎりを食べる）
喜久枝　おにぎりもうまくいかない。
友久　……。
喜久枝　イライラが募るんですけど。
友久　しょっぱいな。
喜久枝　労働者は塩多めがいいの。
友久　炎天下で働く大工さんじゃないんだぞ。
喜久枝　裁縫職人も労働者でしょうが。

喜久枝は卓袱台に置いてあったお茶を持ってきて友久に渡す。

喜久枝　武晴さんは？
友久　休憩なんてしてる場合じゃないって。
喜久枝　あの人、夢中になったらずっとやり続けるもんね。
友久　三人でやる量じゃないんだよ。
喜久枝　文句言わないの、大口の仕事なんて久々なんだから。せっかく武晴さんが取ってきてくれたんだよ。
友久　……。

喜久枝　でも、腹が立つ。
友久　……。
喜久枝　武晴さん、これ見よがしに私が縫ったのをやり直してくるんだけど。
友久　（微笑む）
喜久枝　細か過ぎるのよ、職工さんの作業服なんだから、誰が気にするかっての。
友久　……。

友久は屋根を見上げる。

喜久枝　どうかしたの？
友久　猫いらずが必要なんだよ。
喜久枝　ネズミ、出ちゃった？
友久　猫。
喜久枝　猫に、猫いらず？
友久　ああ。
喜久枝　猫いらずってネズミ用なの知ってる？
友久　……。
喜久枝　……。
友久　冷静に考えればそうだよな。
喜久枝　冷静に考えなくてもそうなのよ。
友久　……。
喜久枝　猫がかわいそう。
友久　大抵の猫はかわいいよ。でもあの猫だけは。
喜久枝　あ、佐伯さんちの猫？
友久　そう。
喜久枝　あいつはちょっと懲らしめる必要があるね。
友久　すぐに悪さしやがるからな。
喜久枝　この間、りゑさん、お店の醤油瓶割られたって。
友久　順平とこの佐吉も顔をひっかかれて泣いてたな。
喜久枝　なにするかわかんない、不良猫不逞猫。
友久　とんでもないな。
喜久枝　あっ、猫いらずをさ、おにぎりに入れてさ、食べさせよっか？　あいつなんでも食べるじゃん。
友久　なかなかの悪だな。
喜久枝　死なない程度の量よ。どこに置いてあるんだっけ？
友久　二階にあったような気がする。
喜久枝　猫いらず仕掛けるの、名人だったよね、お母さん。
友久　ああ。
喜久枝　お父さんにネズミの片づけを押しつけてた。

友久　面倒くさいことは全部だっただろ？
喜久枝　そこがお母さんの愛らしいところよ。
友久　……。
喜久枝　ねえ、東京市がさ、乗合自動車の女車掌を募集してるんだけど。
友久　……。
喜久枝　応募しちゃってもいい？
友久　次郎が出て行ったばかりだからなあ。
喜久枝　次郎さん、なんだかんだで絶対に戻ってくるって。
友久　そうかあ？

大島武晴が木下麻子を連れて店の方から慌ただしく居間に入ってくる。

武晴　友さん友さん友さん友さん。
友久　ん？
武晴　求人求人求人求人。
友久　え？
武晴　この人、木下麻子さん。
麻子　（お辞儀をする）
武晴　表に貼り付けた裁縫職人求むの紙を見たって。
友久　あ、ああ。
麻子　すみません、こんな時間に。
武晴　洋服店でも縫製工場でも働いてたんだって、ミシンできるって。即採用でしょ？
友久　……。
武晴　今さ、詰襟の労働服の大量注文を受けてさ、ちょうど人手が欲しかったところなのよ。
麻子　ああ、生地が何本も積まれてましたね。
武晴　そうそう、あれ全部。
麻子　全部？　いつまでに？
武晴　明日の午前中までに、八十着を納品しなきゃいけなくて。
麻子　え。
武晴　え、なのよ。
麻子　進行具合は？
武晴　まだ十着くらい。
麻子　えー！　そうですか！
武晴　えーでしょ。それなのにここの人たちはさ、のんびりおにぎりなんか食べてやがるからさ。じゃ、早速。
麻子　はい、早速っ。
友久　早速じゃないんだよ。
武晴　え？

友久　（自分を指して）親方。
武晴　本当に間に合わないですよ。
友久　親方と面談。
武晴　とりあえず、お互いにお試しってことで働いてもらいましょうよ。
友久　ちゃんと腕を見ないと。粗雑なものは納品できないぞ。
武晴　喜久ちゃんに手伝わせて何を言ってるんですか、二度手間三度手間ですよ。
喜久枝　……。
武晴　まあ、いいや。（麻子に）あの人、この店の親方だから、ちょっと話してくれる？　俺は作業に戻るからさ。
麻子　あ、はい。
武晴　友さん、さっさと済ませてくださいよ。
友久　わかってるよ。
武晴　じゃ、麻子さん、待ってるから。
麻子　（お辞儀をする）
武晴　喜久ちゃん、おにぎり作業場に持ってきてくれる？
喜久枝　はあい。
武晴　（喜久枝のおにぎりを見て）え？
喜久枝　……台形ですけど何か？
武晴　期待をいつも越えてくるね。
喜久枝　（武晴を睨む）……。

武晴と喜久枝は店の方へ戻る。

麻子　（友久をじっと見ている）……。
友久　……どうかした？
麻子　ああ、いえ、よろしくお願いします。ミシンでも型取りでも針仕事でもなんでも。
友久　ああ、まあまあ。ちょっといくつか質問を。
麻子　はい。
友久　これまではどちらで？
麻子　女学校を卒業してから、洋服店で九年、足袋の縫製工場で一年と半年ほど。
友久　ずっと裁縫の仕事を？
麻子　そうですね。
友久　経歴的には申し分ないな。
麻子　ありがとうございます。
友久　さっきの職人が説明してた通り、今、大量発注の注文がきててね、今更訊くのもあれだけど、すぐにでも働ける？
麻子　ええ、もちろんです。

友久　じゃあ、とりあえず働いてもらって、終わってからこのまま続けるかとかお給金のこととか諸々決めさせてもらうのでいいかな？
麻子　はい。
友久　ま、そんなに儲かってる店ではないから、あんまり期待しないでもらいたいんだけど。ああ、そうだ、表の貼り紙にも書いておいたんだけど、うちに住み込みで働いてもらいたいんだけど、大丈夫？
麻子　はい。
友久　あ、ご家族は？
麻子　ひとりなんです。
友久　そっか、住み込みはこちらとしてもありがたいんだよ。家のこともやってもらうことになるけど大丈夫？
麻子　はい。
友久　料理も洗濯もできる？
麻子　大丈夫です。
友久　じゃあ、あとは仕事を見させてもらって。
麻子　わかりました。

金澤順平が庭づたいに現れる。

順平　よう。
友久　おお。
順平　あ、お取り込み中？
友久　まあ。
麻子　……。
友久　どうした？
順平　あやちゃんの三回忌、昨日、これなかったから、手を合わさせてもらおうと思って。
友久　ああ、そうか。（麻子に）ごめんね、ちょっとだけ。
麻子　はい。
友久　この人、今日から……今日からでいいんだよね？
麻子　はい、もちろんです。
友久　今日からうちで働いてもらう、如月洋子さん。
麻子　木下麻子です。
友久　え？
順平　全然違うじゃねえかよ。
友久　木下麻子さん？
麻子　はい、木下麻子です。
友久　あれ？　どこをどう聞き間違えたんだ。
順平　金澤順平です、こちらの親方とは幼馴染みみたいなもので。
麻子　ああ、よろしくお願いします。

友久　赤目光吉（あかめこうきち）っていう作家、知ってる？
麻子　知らないです。
友久　ほんの一瞬だけ、一世を風靡した作家先生なんだよ。
麻子　そうなんですか。
順平　今は十四松小五郎と名乗っております、どうぞご贔屓に。
麻子　こちらこそ。
順平　じゃあ、ちょっと失礼しますよ。

順平は居間に上がり、仏壇に手を合わせる。

友久　……。
順平　……。
麻子　……。

順平が手を合わせ終わる。

麻子　奥様、ですか？
友久　そう、二年前に亡くなってね。
麻子　やっぱり震災で？
友久　いや、うちのは肺病で、震災の半年前に。ちょっとややこしいんだけど。
麻子　失礼しました。
順平　芯があって気遣いができて気持ちのいい人だったんだよ。

喜久枝が憤然として店の方から現れる。

喜久枝　ため息が大げさ過ぎるくらい大きくなってきたんだけど！　武晴さんの！　私を見てさ！
友久　……。
喜久枝　猫いらず、見つかった？
友久　武晴に盛ろうとしてるだろ？
喜久枝　ちょっとだけならいいでしょ！
友久　量の問題じゃないんだよ。
喜久枝　じゃあ何の問題！？
友久　人としての問題だろ。
喜久枝　（舌打ちをする）ちっ。
順平　女の子が舌打ちは良くないよ。
喜久枝　順平さん！　こんばんは！
順平　……こんばんは。
喜久枝　美代子さん、美代子さんでいいのよね？

麻子　え、いや、違います。
喜久枝　え、桐原美代子さんじゃなくて？
順平　親子揃ってひどいな。
友久　木下麻子さん。
喜久枝　ごめんなさい。それで採用は？
麻子　ああ、決まりました。
喜久枝　では、あらためまして、わたくし、洋服店の娘が裁縫が不得意ってどういうことって女学校で皆に珍しがられた石崎喜久枝と申します。
麻子　はあ。
喜久枝　もう限界です、裁縫大嫌いです、後はお願いします、行きましょう。

と、喜久枝に連れて行かれる麻子を友久と順平が見送る時間があって、暗転。

②

前場から二ヶ月後、お昼頃。
麻子が居間と台所を行ったり来たりして、居間の掃除と昼食の用意を同時にこなしている。すでに卓袱台にはお茶碗、お皿などが並べてあり、卓袱台のそばに米櫃（こめびつ）も置いてある。
喜久枝が縁側に腰を下ろして、婦人雑誌を読んでいる。

喜久枝　（麻子に）ほんとに手伝わなくていいの？
麻子　せっかくのお休みなんだからゆっくりしててください。
喜久枝　野菜を煮込んでる間にお掃除なんて、私だったらこんがらがっちゃうよ。
麻子　女車掌さんに褒められちゃいました。
喜久枝　こっちはまだまだ見習中よ、先輩車掌にねちっこく注意されるの、お客さんの前でよ。
麻子　毎日、大勢の見知らぬ人と接するんでしょう？
喜久枝　接客は慣れてるの。女学校卒業してからは帝国劇場の案内係やってたんだから。
麻子　あらまあ、華やかなところで。
喜久枝　お洋服も髪飾りも凝ってるご婦人方がご来場される時は、心の中でわーってなっちゃった。
麻子　銀座なんて恐れ多くて行けないですよ。
喜久枝　ね、麻子さんて女性のお洋服も縫えるんでしょう？
麻子　まあ、それなりに、はい。

喜久枝　今度、暇な時でいいからさ、こういうの、縫ってくれない？
麻子　喜久ちゃん用に？
喜久枝　そう、私が着るの。

と、喜久枝は婦人雑誌を麻子に見せる。

麻子　素敵ですね、だけど、うちにある生地じゃちょっと無理ですかね。
喜久枝　いいのよ、限りなく似せてくれれば。
麻子　（雑誌をじっくり見ている）
喜久枝　できそう？
麻子　できそうですけど、武晴さんが嫌がりそう。
喜久枝　うちのミシンで女の服を縫うんじゃねえって？
麻子　（微笑む）
喜久枝　職人って面倒くさいよね。

大木健蔵が庭づたいに現れる。

大木　こんにちは。
喜久枝　あ、こんにちは。
麻子　お知り合いですか？
喜久枝　いや、知らない人。（小声で）お父さんの友達かな。
大木　違いますよ。
喜久枝　聞こえてたんだ。
麻子　お店にご用でしたら玄関の方に回ってください。
大木　大丈夫ですよ。
麻子　はあ。
大木　これからお昼ですか？
喜久枝　そうですけど。
大木　煮物のいい匂いがしますね、魚も焼いてます？
麻子　ええ、まあ。
喜久枝　（小声で）怖いね。
大木　怖くないですからね。
喜久枝　また聞こえてる。
大木　僕の分もありますか？
麻子　え？
大木　なかったら別にかまわないんですが。
喜久枝　（小声で）新手の物乞いかな。
大木　違いますよ。
喜久枝　（またまた聞こえてるという驚き）……。
麻子　旦那さんを呼んできますね。

麻子が出て行こうとするが、

大木　ああ、いやいやいやいやいや、すぐに済みますから。
麻子　え？
大木　実は僕、新聞記者なんですよ。
麻子　はあ。
大木　それでですね、記事になるようなことを探しているんですけど何かありました？
麻子　え？
大木　はい。
麻子　え？
大木　なんでもいいですから。
麻子　えっと、この界隈のことですか？
大木　そうですね。
麻子　……ああ、佐伯さんの家の猫がお菓子屋さんのお饅頭をくわえて、ね。
喜久枝　うん。
麻子　お魚屋さんに行ってお饅頭置いて代わりにお魚くわえて逃げたっていうのが、この界隈じゃあ持ちきりの話題ですけど。
大木　この辺じゃ有名な猫なんですね。
喜久枝　ええ、不良猫不逞猫ってみんな呼んでます。
大木　不逞猫っていうのはちょっとあれですね。
喜久枝　それくらいのことをやってるんです、ひっかかれたりお酒の瓶を割られたり、みんな嫌い。
大木　今はどこにいるんでしょうか。
喜久枝　神出鬼没なんですよ、飼い主の佐伯さんなんていつも探してる。
大木　なついてないんですね。
喜久枝　佐伯さんはかわいがってますけどね。

友久と武晴が店の方から入ってくる。

友久　ん？
大木　どうも。
友久　あ。
喜久枝　お友達？
友久　いや、さっき店に来て、背広を注文してくれたんだよ。
喜久枝　なんだ、お客さんか。
麻子　あら、失礼しました。
大木　先ほど店内で目が合いましたよ。
麻子　私と？

大木　はい、三秒ほど。
麻子　ごめんなさい、バタバタしてて気がつかなかったです。
友久　それで？
喜久枝　新聞記者なんだって。
武晴　へええ、え、どこのですか？
大木　いやあ、小さな新聞社で。
喜久枝　記事になるような話がないかって訊かれたの。
武晴　佐伯さんちの猫が、
喜久枝　それはもう話した。
武晴　ああ、話したの。
麻子　お昼を一緒に食べたいとも仰ってましたけど。
友久　ああ、すみません、背広ご注文の方は漏れなく昼食にご招待というわけ
　ではないんですよ。
大木　お腹が空いてましてね。

佐伯陽太郎が庭づたいに現れ、顔を出す。

佐伯　うちの猫、きてる？
友久・武晴・喜久枝・麻子　（みんなバラバラに）今日は見てないです。
佐伯　ああ、そう。

佐伯は去っていく。

大木　今の人、もしかして？
喜久枝　はい。話題の猫の飼い主さんです。
大木　ああ、やっぱり。
友久　……えっと、まだなにか？
大木　逆になにかありますか？
友久　え？
大木　やっぱりちょっと猫の話は記事としては弱いじゃないですか。
友久　ああ……（武晴に）なんかある？
武晴　うちの店の宣伝をしてもらいましょうよ。
友久　ああ、そうしてもらうか。
武晴　俺の寸法の測り方、迅速かつ丁寧じゃなかったですか？
大木　そう言われると、そうでしたねえ。
武晴　仕上がりもバチッと決めるんで、とりあえず、今回はうちの店の良い雰
　囲気を記事にしてもらって、ね。
友久　そうだな。
友久・武晴・喜久枝（声を合わせて）　石崎洋服店にようこそ！　皆様のご体
　型に合わせた生地、型紙、サイズを豊富に取り揃えております！　確かな技

術を持った職人たちがあなたにピッタリな一着をつくりあげます！　皆様のご来店、心よりお待ち申し上げます！

麻子　……。

大木　いいですね、とてもいいですね。

麻子　あっ。

と、麻子は料理の様子を見に台所へ行く。

喜久枝　手伝おうかー？

麻子（声）　お願いできますー？

喜久枝　うん。

喜久枝は台所へ行く。

大木　今出て行ったご婦人は奥様ですか？

友久　いえ、娘です。

大木　先に出ていった方の。

友久　ああ、うちの職人です、住み込みの。

大木　ああ、住み込みの方なんですね。

友久　なにか？

大木　先ほどテキパキした仕事ぶりを見て感心したんですよ。

友久　ありがとうございます。

大木　では、僕はこれで。仕上がりを楽しみにしてます。

武晴　まかせてください。

友久　ありがとうございました。

大木は去っていく。

友久　何新聞か訊くの忘れたな。

武晴　紹介記事、絶対載せてくれませんよ。

麻子と喜久枝が食卓の用意をする。食事の支度を終え、全員、腰を下ろす。

友久・武晴・喜久枝・麻子　いただきます。

友久、武晴、喜久枝、麻子が食事をしている時間が少しあって、

武晴　麻ちゃんがいたさ、

麻子　はい。

武晴　本所の洋服店ってなんていうお店。
麻子　清水洋服店です。
武晴　大きい店だったの？
麻子　そんなに大きくは……でも職人さんは常に六人はいましたね。
武晴　へええ、みんな、麻ちゃんぐらいの腕前なの？
麻子　いえいえ、私なんて下手くそな方で。
武晴　麻ちゃんで！？　そうかあ。
麻子　震災で焼けてしまって今はもうないですけど。

川上りゑが塚田次郎を連れて店の方から現れる。

りゑ　まいど～、こちらをお届けにきました。
次郎　……。
友久　あっ、次郎。
喜久枝　……。
麻子　……。
武晴　……。
りゑ　通りの向こうからずっと友さんの店をうかがってんのよ、もう気になっちゃって気になっちゃって。
次郎　……。
りゑ　追いかけて捕まえて連れてきた。
次郎　……。
武晴　りゑさん、すみません。
りゑ　お隣のよしみ。で、次郎ちゃん、また働きたいって言ってるよ。
次郎　武晴さんが土下座するなら店に戻ってもいいと僕は思ってます。
武晴　ああ？
次郎　じゃあ、武晴さん、どうぞ。
武晴　やるか馬鹿。
次郎　別にいいならいいんですよいいなら別に。
武晴　なんでお前そんなに偉そうなんだよ。
次郎　別にいいならいいんですよいいなら別に。
喜久枝　あ、（麻子に）あの人が次郎さん、武晴さんと喧嘩して出ていっちゃった職人さん。
麻子　ああ。
次郎　え、新しい人ですか？
友久　そう、木下麻子さん。
麻子　（お辞儀をする）
次郎　……。
武晴　お前の倍は頼りになる。
次郎　誇張しなくて大丈夫ですよ。

武晴　本当は八倍のところを抑えてやったんだよ。
りゑ　なんで喧嘩したの？
次郎　僕のことをヨボさんって呼んだんです。
武晴　だから呼んでないよ、お前が余りにのんびりやるからヨボヨボ爺さんかって言ったの。
次郎　ヨボヨボ爺さんでも腹立たしい。
りゑ　予想通りくだらない喧嘩だね。
友久　そうなんだよ。
次郎　僕は土工をやってた頃に朝鮮人に仕事をとられたことがあるんですよ、あいつら半分の給金で働くから。だからヨボさんはちょっと。
麻子　……。
次郎　とにかく武晴さんが土下座しないと僕は戻りません。
喜久枝　ねえ、もし仮に次郎さんが戻ってきたら麻子さんをお暇させることにはならないよね？
友久　ああ、でも、もう一人雇うっていうのは苦しいぞ。
喜久枝　私の車掌の仕事、見習い期間過ぎてちゃんとお給料もらえるようになったら平気でしょ？
友久　ただ今の売り上げじゃあな。
麻子　……。
友久　麻ちゃんは気にしないで。
武晴　そうそうそうそう。
喜久枝　だったら次郎さんはさようならだね。
友久　次郎、ごめんな。
次郎　え？
友久　うん。
次郎　え、え？
友久　達者でな。
次郎　え、え、え？
友久　せっかくだから飯、食っていけよ。
次郎　……。
りゑ　じゃ、私は帰るか。
武晴　りゑさん、ありがとう。なんか無駄足になっちゃったけど。
りゑ　ほんとよ。次郎ちゃん、元気でね。
次郎　え。
りゑ　たくさん食べるんだよ。
次郎　いや、あの、え、あの、すみません、ごめんなさい、申し訳ありません！

少しの沈黙。

次郎　この二ヶ月、日雇いの工事の仕事に戻ったんですけど、やっぱり、あの、

裁縫の仕事をやりたいんです、あの、下手くそなのも自覚してますけど、まだまだ自分は伸び代があると思ってるし、漸くミシンを触らせてもらうようになって、これからって時だったし、悪いのは武晴さんかもしれないけど僕です！　僕が悪いんです！　もう一度働かせてください！　お願いします！

武晴　本当に反省してる？
次郎　してますよ！
武晴　……。
次郎　親方っ！
友久　うーん、どうしたもんだろうな。

それぞれが次郎をどう受け入れるか考える時間があって、

りゑ　ね、麻子さん。
麻子　はい？
りゑ　女性用の洋服は縫えないの？
麻子　縫えますよ。
りゑ　そしたら、そっちの売り上げでなんとかなったりしないの？
喜久枝　なるかも。
武晴　どうかな、うちは紳士服専門店だから、今の顧客が嫌がると思うな。
喜久枝　自転車乗りの半ズボンとかの注文も受けてるじゃん。
武晴　俺はテーラー一本でやりたいのよ。
喜久枝　理想と現実。
りゑ　友さんはどう思う？
友久　いいと思うよ。
武晴　麻ちゃんはやってみたいの？
麻子　どうでしょう……。
りゑ　やってみたいのね？
麻子　ミシンが一台だとやっぱり……。
りゑ　ああ、そうなんだ。
武晴　さすがに交代交代っていうのは無理。
りゑ　（友久に）そうなの？
友久　そうだねえ。
武晴　女物の洋服をやったとして、どれくらい注文が入るかってのも分からないじゃないですか。
喜久枝　この界隈じゃあ洋服着てる女の人、そんなにいないもんね。
りゑ　みんな着たいけど恥ずかしいんだよ。
喜久枝　私は全然だけど。
りゑ　若さよ若さ。洋服を着る良いきっかけになるんじゃない？
喜久枝　りゑさんも洋服着たいとは思ってるってことね。

りゑ　私は別に、ほら、だって、女物の洋服屋さん、あやさんがやりたがってたでしょ？
喜久枝　あ……。
友久　……。
喜久枝　うううううう、お母さんの思いをりゑさんが代わりに言ってくれたことが娘としては悔しい。
りゑ　は？
喜久枝　私が提案したかった。
りゑ　親不孝者。
喜久枝　……。
りゑ　冗談よ。
喜久枝　……。
武晴　でも現実的にミシンは譲れないですよ。
友久　もう一台、買うしかないか。
武晴　そんな余裕あります？
友久　そこなんだよ。
りゑ　ミシンってどれくらいするの？
友久　だいたい……（手でミシンの幅を示す）。
りゑ　幅じゃなくて。
喜久枝　足廻し用だったら……（手でミシンの高さを示す）。
りゑ　高さでもないから。
武晴　中古だったら四、五十円、新しいのだったら国産だと百円前後、シンガーミシンだと百六十円くらいですね。まあ、ピンキリだけど。
りゑ　そんなにするんだ。
武晴　ミシンは大抵月賦払いができるから、前金でだいたい三十円入れて、後は月賦で五円くらい払っていくんですよ。
友久　詳しいんだな。
武晴　裁縫職人なら気になるでしょ。
友久　そういうもんか。
武晴　中古は勘弁ですよ。絶対新品。シンガーだったら申し分ないけど。
りゑ　前金と半年分までなら貸せるよ。
友久　え、貸してくれるの？
りゑ　かまわないよ。
友久　なんだ、儲かってなさそうで儲かってんだな醤油屋さんて。
りゑ　へそくりが見つかったの、達吉の。

少しの沈黙。

りゑ　あの人、醤油の樽の裏底を二重にしててさ、ついこの前、裏底が一枚、落ちてたのよ、そこに手拭いで包まれた札束が縛り付けてあってさ。売り上

げをきっとくすねてたんだと思う。
友久　……それは貸せるお金じゃないだろ。
りゑ　いいのいいの、なにが欲しいってわけでもないし。あやさんにはお世話になったから。
喜久枝　……。
りゑ　私が達吉とあの子のことを探して、上野とか浅草辺りを歩き回ってるって近所で噂になってるみたいだけど、それ本当の話だよ。
武晴　……。
りゑ　震災からもうすぐ二年も経つのに、暇があると探しにいっちゃう。どこかで働いているんじゃないかって店に入って、誰かが育ててくれてるんじゃないかって知らない人の家をのぞいてっていうのをずっと繰り返してる。だから、なにかやめるきっかけがほしくてさ。
武晴　……。
りゑ　へそくりといえど達吉が残したお金をパッと使ったら諦めもつきそうじゃない。
友久　いや、でもな……。
りゑ　むしろ、私がお願いしたい、使っちゃってよ。
友久　……。
次郎　ありがとうございます。
武晴　おい。
りゑ　ちょっと待ってて、取ってくる。

りゑは出ていこうとするが、

武晴　りゑさん、俺も一緒に。
りゑ　なんでよ？
武晴　お金を借りるのに、取ってきてもらうのはおかしいでしょう。
りゑ　そう？　だったら次郎ちゃんがきた方がいいんじゃない？
武晴　俺が行きます。
りゑ　（微笑む）
武晴　ちょっと行ってきます。
友久　ああ。

りゑと武晴は店の方から出て行く。

友久　話したよね、りゑが震災で旦那と息子を亡くしたの。
麻子　ええ、聞きました。
喜久枝　亡くしたんじゃなくて行方不明でしょ。
友久　まあ、そこは……。
喜久枝　まあ、そうなんだけど。

麻子　……。

次郎は何気なく卓袱台の座布団に腰を下ろして、

次郎　りゑさん、地震の後の何日かはほんとに混乱してましたよね、朝鮮人に殺された、朝鮮人を探してこいって、なぜか僕が詰め寄られちゃって。
麻子　……。
次郎　まあ、あの状況じゃしょうがないですけどね。
喜久枝　次郎さん。
次郎　ん？
喜久枝　まだよ、まだ。
次郎　え？
喜久枝　さりげなく身内っぽく座らないで。
次郎　（立ち上がる）……。
麻子　震災の時はこの界隈でも自警団はできたんですか？
友久　そりゃ、うん、どこの町でも自警団はできたでしょう。
麻子　親方も見張りに立ったんですね。
友久　武晴も次郎も、あ、順平も、この界隈の男たちはみんな駆り出されたよ。
麻子　……。
喜久枝　朝鮮人はいなかったんだよね。
麻子　え？
喜久枝　うちの自警団は朝鮮人を見なかったんだって。そうなんでしょ？
友久　ああ。
麻子　朝鮮人を見なかったんですか？
友久　そうだね、うん。な。
次郎　ええ、見ませんでしたよ。
麻子　……。
友久　どうかした？
麻子　ああ、いえ……次郎さんのお食事、用意してきますね。

台所へ向かった麻子を友久、喜久枝、次郎がなんとなく気にする時間があって、
暗転。

③

前場から二週間後、夕暮れ。
麻子が店の方から金澤和子を連れて入ってくる。

麻子　ちょっと待っててくださいね。

麻子は急いで二階へと上がっていく。
和子は興奮しているらしく、気持ちを抑えようと深呼吸をする。
麻子が婦人雑誌の束を抱えて下りてくる。

麻子　（婦人雑誌の束を卓袱台に置く）よいしょっ。
和子　ありがとう。
麻子　落ち着きました？
和子　今、深呼吸したから。
麻子　和子さんでもあんなに興奮されるんですね。
和子　いや、もう恥ずかしい、冷静にならなくっちゃいけないのにね、こういう時は。
麻子　この中から参考になるのを見つけていきましょう。
和子　ありがとう。私、洋服なんて着たことないから頼りにさせてね。
麻子　モダンガールみたいなお洋服ですよね？
和子　ああ、そうなのかな。
麻子　（あるページを見せて）これとか。
和子　えええええ、ちょっとそんなに腕みせちゃうの？　もっと地味でいいのよ。
麻子　そうですか？
和子　あ、でも、どうなんだろう、どう思う？
麻子　いや、あの、和子さんが普通にお洋服を着ていくだけでは物足りないのではと思って。
和子　普段洋服を着ない私が洋服を着ていくんだからそれなりの主張にはなると思うんだけど。
麻子　すみません、そうですよね。
和子　いいのいいの謝らないで。
麻子　（あるページを示して）こんなのどうでしょう？
和子　ああ、いいんじゃない？　うちの若い先生はこういうの着てるし。

喜久枝が二階から下りてくる。

喜久枝　あ、和子先生だ。
和子　お邪魔してます。
喜久枝　え、え、どうしたの、先生、そんな雑誌なんて読んじゃって。
和子　理由があるの。
喜久枝　私が読んでたらくだらないって蔑んだ表情を前面に押し出してたじゃん。
和子　だから理由があるんだって。
喜久枝　なになに？

和子　うちの学校、自由な校風だったのに春から校長が変わってだんだんと規則が重視されるようになったの。規則規則って内実は女性蔑視、女性差別的なことばかりで、そしたら今日、和でも洋でも自由だった教員の服装を和装で統一なんて言い出したわけ、それも女教員だけよ。だから、私があえて洋服を着て抗議してやろうと思って、憤懣やるかたなしの状態で麻子さんのところにおしかけちゃった、というわけ。

喜久枝　ふふふ、応援します。

和子　ありがとう。

喜久枝　で、どういうの着るの？

麻子　（あるページを示して）これにしようと思ってます。

喜久枝　は？

和子　だめ？

喜久枝　だめでしょ、こんな抑えめな洋服じゃ意味がないよ。抗議するんだったらもっと大胆にするべきでしょ、銀座、丸ノ内を闊歩するような。

和子　モダンガールはちょっと……。

喜久枝　和子先生、やってやらないと。

和子　そう？　（麻子に）どう思う？

麻子　私も喜久ちゃんに賛成です。

和子　そうだとしたら、どんな感じになるの？

麻子　（雑誌を見て）そうですね……これかな？

喜久枝　それだね。

和子　ええっ！

喜久枝　きっと和子先生、似会うと思う。

和子　え、似合う？　無理してる感じにならない？

喜久枝　いや、ギリギリいけると思う。

和子　え、そう？　うちの子供たちが馬鹿にされない？　でも作れるのこんなの？

麻子　大丈夫だと思います。

喜久枝　（自分の服を示して）これだって麻子さんが縫ってくれたんだから。

和子　そうなんだ。

喜久枝　女性のお客さんも増えてきてるんだから。

麻子　徐々に徐々にですけど。

和子　（そのページを見ながら）でも、

りゑ　誰かと思ったら和子先生だ。

と、りゑが庭づたいに現れる。

和子　ああら。

りゑ　え、ついに洋服着るの？

和子　理由は喜久ちゃんに聞いて。

りゑ　ん？
喜久枝　和子先生ところの校長が教員は和服に統一っておふれを出したからあえて洋服を着て抗議するんだって。
りゑ　へえええ、さすがだね。
喜久枝　りゑさん、なんか用？
りゑ　用って、私が投資した麻子洋服店の様子を見にきたの。
麻子　昨日、りゑさんが紹介してくれた木村さんがいらっしゃいました。
りゑ　木村さん、行ってくれたんだ。
麻子　はい、ワンピースを注文してくれて。ありがとうございます。
りゑ　なんだか私も嬉しい。
麻子　（微笑む）
りゑ　それで先生はどんなの着るの？
和子　（あるページを示して）どう？
りゑ　え、普通じゃない？　普通のモダンガールじゃない？
和子　え？
りゑ　抗議するんだったら奇抜で素っ頓狂で簡単には受け入れられないようなのがいいと思うよ、例えば、右半身と左半身で、なに、デザインっていうの？それがまるで違ったりするのとかさ。
喜久枝　攻めるね。
和子　攻めすぎよ。
りゑ　抗議するんだから。
喜久枝　余った生地の切れ端を集めて全部縫い合わせて色とりどりにするのは？
りゑ　全身つぎはぎってこと？
喜久枝　そうそう。
和子　ルンペンじゃないんだから。
喜久枝　だから綺麗な生地を使うの。
りゑ　麻子さんが縫い合わせるのが大変そう。
麻子　ああ、でも生地代がかからなくていいですね。
喜久枝　でしょう？
りゑ　あっ、ダンスホールに着ていくような煌びやかなドレスなんてどう？
喜久枝　その線もあるか。
和子　そんな線ないのよ。
麻子　順平さんにもタキシードを着ていただいて、ご夫婦で校長室に乗り込む、踊りながら。
和子　麻子さんもそんなふざける人だったんだ。
麻子　あ、いえ、そんな。
和子　そのうち、喜久ちゃんの女車掌の制服って言い出しそうだからもうこの話は終わり。
りゑ　どうするの？

和子　（あるページを指して）これ、麻子さんが選んでくれたのにする。
りゑ・喜久枝　普通。
和子　いいの。麻子さん、これでお願いできる？
麻子　はい。じゃあ、上で採寸しましょう。
和子　うん。
喜久枝　私もついていっちゃおう。
和子　見せ物じゃないの。
りゑ　和子先生が似合ったら私も作ってもらおうかな。
和子　りゑさんもついてくるの？
麻子　先に上がっていてください、昨日こしらえたお饅頭を持って上がりますから。
喜久枝　ちょうどお腹すいたところだった。
和子　ありがとう、ごめんね。
麻子　いえ。

と、和子、りゑ、喜久枝は二階へと上がっていく。麻子は台所に行く。
入れ替わるように、店から友久と順平が入ってくる。
友久は居間に誰もいないことを確認して、

友久　やっぱり、あやのことで？
順平　そう、親御さんが気にしてさ、肺病の人と暮らして感染らなかったんだから、こんなに丈夫なことはないって俺は言ってやったんだけどな。
友久　ちゃんと婚前調査しやがったんだな。
順平　するだろ、けっこう大きな料理旅館だぞ。
友久　まあ、喜久枝が旅館の女将っていうのもな、モダンガールもどきの小娘は一日中着物に耐えられないだろうし。
順平　良縁だと思ったんだけどな。
友久　喜久枝に会わせる前で良かったよ。
順平　ああ。
友久　料理旅館の若旦那とどこで知り合ったんだよ？
順平　震災の時、若旦那は隣町の自警団で、うちの自警団と朝鮮人はどこにいたかとか情報交換をして以来、なんか交流をするようになって。
友久　ふうん。
順平　うちは朝鮮人を三人やったって意気揚々と語ってたな。

麻子がお饅頭を盛った皿を持って戻ってくる。

順平　よっ。
麻子　あ、今、和子さんが上で。
順平　知ってる。洋服でしょ？

麻子　はい。
順平　よろしく頼むよ。
麻子　きっと似会うと思いますよ。
順平　惚れ直す、なんてことになっちゃう？
麻子　かもしれないですよ。
順平　勘弁してよー。
麻子　（微笑む）

佐伯が庭づたいに顔を出す。

佐伯　うちの猫、きてる？
友久・順平・麻子　（バラバラに）今日はきてないです。
佐伯　ああ、そう。

佐伯は去っていく。

麻子　私、実はまだ佐伯さんの家の猫を見たことがないんです。
順平　え、そうなの？
麻子　もう二ヶ月も経ってるのにまだ一度も。
順平　どこにもいそうで、どこにもいないからなあの猫は。
麻子　大きな茶色の猫なんですよね？
順平　そうそう、佐伯さんが朝鮮から持ち帰った猫。
麻子　佐伯さん、朝鮮に住んでたんですか？
順平　従軍してたの、ほら、五、六年前に朝鮮のあちこちで暴動が起こった時に。
麻子　ああ、そうなんですね。
順平　日本に戻るって時に農村で取り残された子猫を見つけたんだって。
麻子　……。
順平　一度は見捨てて立ち去ったんだけど、引き返して保護したらしいよ。
麻子　……。
友久　でも、その小さな命を救ったおかげでな、佐吉もせつ子も顔をひっかかれたもんな。
順平　親としては復讐をしないとな。
友久　もし道なんかで出くわしたら目を逸らさずにゆっくりと後ずさらなきゃだめだよ。
麻子　そんな熊じゃないんですから。
友久　熊と思うくらいが丁度いい。
順平　うん。
麻子　ええー？
友久　ちょっと練習しとこうか。

麻子　お願いします。

友久は麻子をギラッと睨みつける。麻子は負けじと友久から目を離さない。お互い威嚇するように目を合わせたまま、麻子は後ずさりし、そのまま階段へ行き、二階へと上がっていく。

順平　いいと思うぞ。
友久　なにが？
順平　君たち、はたから見たら夫婦だと思うだろな。
友久　……。
順平　店でも良い雰囲気で仕事してるからな。
友久　……。
順平　再婚は考えてないの？
友久　おい。
順平　喜久ちゃんが結婚にあんまり積極的じゃないのは、君のことを気にかけているからじゃないの？
友久　そんな気遣いができる娘に育てた覚えは……。
順平　……。
友久　再婚するにしても喜久枝が嫁いでからだよ。
順平　再婚する気はあるんだな。
友久　……。

次郎が店の障子戸を開けて、顔を出す。

次郎　親方。
友久　ん？
次郎　大木さんがいらっしゃいました。
友久　あれ、この前、背広取りに来たよな？
次郎　今日は別件みたいです。
友久　あ、そう、そっち行くよ。（立ち上がり）ちょっと行ってくる。
順平　ああ。
友久　ところで締め切りは大丈夫なの？
順平　（卓袱台に顔を伏せる）……人の結婚の世話してる場合じゃないんだよこっちは。
友久　……。

友久が出て行こうとすると、店の方から大木が入ってくる。

友久　おおぉ。
大木　どうも。

と、大木は勝手に居間に入る。

友久　お店の方でうかがいますけど。
大木　たった今、別のお客さんもいらしたので。
友久　ああ、そうですか。
大木　女物の洋服もやりだしとうかがいましたが。
友久　そうなんです、うちの女職人が、なかなか良い腕前で。
大木　実は妻に洋服をつくってやりたいと思いましてね。

大木は卓袱台の辺りに腰を下ろす。
順平が顔を上げて、

順平　やっぱり大木君か。
大木　あ。
順平　久しぶりだな。
友久　知り合いなの？
順平　俺が前に新聞で続き物の連載をしてた時の担当。
友久　いつの続き物？
順平　東都新聞の。
友久　ああ、あまりの支離滅裂さに打ち切りになったやつか。
順平　あれをきっかけに俺の作家人生は下り坂、いや、急降下だよ。
大木　あの後、僕も居づらくなって退職しましたから。
順平　なに、今はどこで？
大木　小さな新聞社ですよ。
順平　何新聞？
大木　まあ、いいじゃないですか。
順平　この界隈に越してきたの？
大木　そうなんですよ、神社の裏手に。
順平　本郷の方が良い洋服店あっただろ？
大木　お高くとまった店ばかりで気に食わなかったんですよ。
順平　ここは庶民専用テーラーだからな。
大木　金澤さん、今は何をされてるんですか？
順平　金澤さん？　昔は先生って呼んでくれてたじゃん。
大木　もしかしてまだ大衆小説を？
順平　そうだよ、筆名を変えて続けてる、今は十四松小五郎。
大木　聞いたことないですね。
順平　なだらかな下り坂にはなってきてるんだよ。
大木　そうですか。
順平　今度、うちにも書いてくださいよって言ってくれよ。

大木　金澤さんとは相性が悪いですから。
順平　たしかに。
友久　あの、洋服のことなんですが。
大木　はい。
友久　今、呼んできますんで。
順平　和子の洋服をやってんじゃないの？
友久　あ、そうか。
順平　さっきから楽しそうな声が聞こえてくるよ。
友久　すみません、ちょっとまだ取り込み中で。
大木　少し見学させてもらっても？
友久　え？
大木　二階ですよね？
友久　……ええ。
大木　じゃあ、ちょっと失礼して。
友久　もしかしたら着替えてるかも。
大木　（微笑む）

と、大木は二階へ上がっていく。

友久　……。
順平　……。
友久　なんだ、あの落ち着きようは。
順平　昔はあんな感じじゃなかったんだけどな。
友久　そうなの？
順平　そうだよ、もっと早口で、例の続き物の時なんて締め切り間近になると俺以上に慌て出して勝手に話の筋を決めやがったからな、そのせいで滅茶苦茶になった……。
友久　主人公の双子の兄が実は実のお父さんだったという衝撃の展開で読者を震撼させたという、
順平　言わないでー！

二階から和子、喜久枝、りゑ、麻子の「キャー！」という声が聞こえてくる。大木が戻ってくる。

大木　頬をはたかれ、脛をつま先で蹴られました。
友久　落ち着いてるね。
大木　慌てても百害あって一利なしですから。
順平　慌てん坊（ぼっ）ちゃんって呼ばれてたのにな。
大木　……。

順平　しばらく会わない間になにかあったんだな。
大木　……。
順平　……。

麻子が二階から下りてくるが、

大木　震災ですよ。

の言葉に、下りるのをやめ、階段の途中で聞き耳を立てる。

麻子　……。
大木　……慌ててましたから。
順平　慌ててなかったやつなんてひとりもいないよ。
大木　……。
友久　……。
順平　俺はあれからなかなか眠れなくなったよ。
友久　昼間寝てるからだろ。
順平　……お前もだろ？
友久　……。
大木　僕もです。
友久　……。
順平　暑くなってくると思い出すんだよなあ。小説にも影響してくる。
大木　……。
順平　俺は自分があんな野蛮な人間だとは、
友久　順平。
順平　ああ、ごめん。
友久　……。
大木　野蛮な人間？
順平　なんでもないよ。
大木　自警団に加わった時のことですか？
順平　なんでもないって。
友久　こいつは地震で崩れた布団屋から布団を二、三枚くすねてきたんですよ。
順平　地震が落ち着いたらちゃんと返したけどな。
大木　そんなの野蛮とは言いませんよ、きちんと返してるわけですし。
順平　多少、汚れたぞ。
大木　朝鮮人のことでしょう？

少しの沈黙。

順平　俺たちの自警団は、朝鮮人は見なかったんだよ。

友久　……。
麻子　……。
大木　本当ですか？
順平　ああ。
大木　……隠しているわけではなく？
順平　新聞記者は踏み込んでくるね。
大木　自警団の検挙が東京で始まったのが九月の半ばです、それから検事総動員の大量検挙に踏み切ったのが十月一日以降なんですよ。二週間も検挙までに猶予があった地域があったわけです。そこで、
順平　隠蔽があってもおかしくはない？
大木　そういうことです。
順平　そうは言われてもな、俺たちは朝鮮人を見つけることすらできなかったからな。それにあれだろ、検挙された自警団もほとんどが無罪か執行猶予付きで、誰も大した罪に問われなかったわけだろ？
大木　ええ。
順平　どうして大木くんは蒸し返そうとしてるの？
大木　……。
順平　……。
大木　震災の時に、うちの社は倒れもせず焼けもしなかったから被災して二日後には新聞を出せたんです。僕は「不逞鮮人、東京市の各所で爆弾を投ず」「鮮人二百名襲来し放火強姦井戸に毒を投ず」という記事を書きました。
友久　……。
順平　……そうか。
大木　その罪悪感があって、つい、このことに関しては立ち入ってしまうんです。
順平　大木くんの後悔なのか罪なのかわからないけどさ、俺たちを糾弾したってそれが晴れるわけじゃないし、この界隈で生活していくなら、もう何も訊かないでくれる？
大木　……。
順平　俺たちは後悔してるし反省もしてる。
麻子　……。
順平　震災の時、俺たちは朝鮮人を見なかった。
大木　……。
順平　これで十分でしょ？
麻子　……。

友久、順平、大木、麻子、それぞれが長く沈黙している時間があって、

麻子　すみません、雑誌を置きっぱなしにしてしまって。

と、麻子は下りていく。

友久　ああ、これ？
麻子　そうなんです。
友久　（雑誌の束を麻子に渡す）はい。
麻子　（受け取って）ありがとうございます。
大木　先ほどは失礼しました。
麻子　入る前にひと声かけてくださいね。
大木　はい。
順平　どう、うちの女房は？
麻子　今、私が昔作ったお洋服を着てもらってるんですけど。
順平　どう？
麻子　（微笑む）
順平　その微笑みはどっちと捉えればいいの？

和子とりゑと喜久枝が慌てて二階から降りてくる。

りゑ　火事！　火事！　火事！
順平　え？

次郎も慌てた様子で店の方から現れ、

次郎　向こうの通りで煙が！！

友久、次郎、りゑ、喜久枝、麻子は外へと出て行く。大木は慌てずに外へと出ていく。
和子は外を見ているが、順平は洋服を着た和子を見ている。

順平　へええええ。
和子　なによ。
順平　馬子にも衣装とはこのことでしょうか。
和子　着たくて着てるんじゃないから、戦いの鎧みたいなもんだから。
順平　……。
和子　あんまり見ないでくれる？

外で鐘の音が鳴り響く。その音を聞いた和子と順平が外を見る時間があって、
暗転。

④

前場から一週間後、夜。
居間に友久、武晴、麻子がいる。友久は徳利を置き、お猪口で酒を呑んでいる。麻子は縁側から外を見て、喜久枝の帰りを待っている様子。

麻子　私が聞き間違えたんですかね、今日は夕方までの勤務だって言ってたと思うんですけど。
武晴　喜久ちゃんが夕方までって麻ちゃんに伝えてたの、俺、見てたよ。
麻子　あ、もしかしたら、どなたかお休みが出ちゃって急に夜まで働くことになったのかもしれませんね。
武晴　でも、夜の勤務でもこの時間には帰ってきてるでしょ？
麻子　ああ、そうか。
武晴　まあ、上野だから帰ってこれないってことはないか。
麻子　（友久を見る）……。
友久　（微笑む）
麻子　さっきからずっと微笑んでいらっしゃる。
武晴　（店の方に向かって）次郎――！

店から次郎が縫い物をしながら現れる。

次郎　（縫い物を見せて）すみません、まだ終わってないんです。
武晴　喜久ちゃんがまだ帰ってこないんだよ。
次郎　ええええー！
武晴　それ、もういいからさ、喜久ちゃんを探しに行こう。
麻子　続きは私がやっておきますよ。
次郎　いいいいいいいいいい、俺の仕事だから。
麻子　でも、
次郎　いいいいいいいいい、探してきた後に俺がやるから。
麻子　……。
次郎　（友久の隣に座って）こりゃあ、良い人ができたのかもしれないですね。
友久　（微笑んでいる）
次郎　きっと浅草の不良ですよ、ああいう手合いにかぎって男前だったりするから喜久ちゃんみたいな子はイチコロだろうなあ。
友久　（お猪口に酒を注いで次郎にすすめる）
次郎　（グイッと呑む）恋愛となるとなかなか厄介ですよ恋愛となると。
友久　（再び次郎に酒を注いで）
次郎　（グイッと呑む）のぼせ上がってる女っつうのは、こちらが何を言おうと、暖簾に腕押し豆腐にかすがい糠に釘ですからね。
友久　（三度次郎に酒を注いで）

次郎　（グイッと呑む）でも俺にまかせてください。探し出して相手の男を、
武晴　次郎。
次郎　はい、行きましょうか。
武晴　じゃ、ちょっと行ってきますから。
友久　（武晴にも酒をすすめる）
武晴　（酒を断って）言葉を無くしたんですか？
友久　（微笑む）
麻子　お願いしますね。
武晴　うん。

と、武晴と次郎は店の方から出ていく。

麻子　次郎さんは男だ良い人だなんて茶化してましたけど、最近、物騒ですからね、この間の畳屋さんの火事も放火だっていう噂があるくらいなんだから、大事にはなりませんでしたけど。
友久　……。

麻子は仏壇に手を合わせる。

友久　……どうしたの？
麻子　あやさんに喜久ちゃんを守ってくれるようにお願いしてるんです。
友久　……。
麻子　それと、あやさんにお許しいただきたいこともありまして。
友久　え……。

麻子は手を合わせ終える。

麻子　親方にお願いがあります。
友久　……。
麻子　こんな時に言うことじゃないかもしれないですけど、親方と二人きりというのも滅多にない機会なので。
友久　……。
麻子　……。
友久　女物の洋服の売り上げの分は増やしてるでしょ？
麻子　お給金の話じゃありません。
友久　人参はどうしても。
麻子　食べ物の好き嫌いの話でもありません。
友久　意識して減らすようにはしてるんだよ。
麻子　おならのことでもありません。
友久　針持てば　雨のしずくで　風を縫い。

麻子　新作の俳句を披露してもらいたいわけでもないです。
友久　ええ？
麻子　……。
友久　……。
麻子　私、朝鮮人なんです。

少しの沈黙。

友久　え？
麻子　木下麻子は通り名で、本名は朴敬愛（パクギョンエ）と申します。
友久　……。
麻子　今まで隠していて申し訳ありません。
友久　え、本当に？
麻子　はい。
友久　そんなに日本語が話せて？
麻子　私は朝鮮の釜山っていうところの生まれで、
友久　釜山。
麻子　ええ、その釜山で日本人が開いた洋服店で、私の両親が住み込みで働いていまして、私は日本語が生活にある環境で生まれ育ったので日本語ができるんです。あと、裁縫も。
友久　……。
麻子　ちょっと待っててくださいね。

と、麻子は二階へ上がっていく。

友久　……。

麻子が紙を持って下りてくる。

麻子　これ、（紙を差し出す）、朝鮮の戸籍です。
友久　（受け取って）……。
麻子　ここに、私の名前が、朴敬愛。
友久　……ああ、そう、ああ、これ。
麻子　すみません、黙っていて。
友久　いや、別にいいんだけど、いいのかな。
麻子　私は首になる覚悟で打ち明けています。
友久　……。
麻子　それで、私のお願いというのは朝鮮人でも雇ってほしいということではないんです。

友久　ん？
麻子　……。
友久　……。
麻子　私と結婚してもらえないでしょうか？
友久　え？

少しの沈黙。

友久　え、ちょっと、ついていけてないんだけど。
麻子　すみません、そうですよね。
友久　え、え、え、今、麻ちゃんが実は朝鮮人だと打ち明けて、俺に結婚を申し込んだという流れだよね？
麻子　その通りです。
友久　結婚……。
麻子　私は親方を愛しています。
友久　……。
麻子　朝鮮人だと打ち明けたのも、私の恋心が純粋であることを親方に示したかったからです。
友久　……。
麻子　私と結婚してもらえないでしょうか。
友久　……。

少しの沈黙。
そこへ、喜久枝と徳留篤郎が背後を気にしながら音を立てないように庭づたいに入ってくる。

麻子　あっ。
喜久枝　（しーっと指を口にあてる）
麻子　え？
友久　……。

その間、喜久枝は友久と麻子が声を発しないように口に指を当て続けている。篤郎が耳をそばだてて、通りの方をうかがう。

篤郎　（喜久枝にうなずく）
喜久枝　（うなずき返す）

篤郎と喜久枝は大きなため息をつく。

麻子　喜久ちゃん、

喜久枝　尾行されちゃった。
麻子　尾行？
喜久枝　警察。
麻子　警察？
喜久枝　ああ、怖かった。
麻子　喜久ちゃん。
喜久枝　はい。
麻子　武晴さんと次郎さんが心配して上野の方まで探しにいってくれてるんですよ。
喜久枝　え、そうなの。
麻子　そうですよ。
友久　……。
喜久枝　（友久に）ごめんなさい。
友久　……。
喜久枝　やっぱりこういう時は父親って娘を巴投げしたりするの？
友久　は？
喜久枝　なんでもない。
友久　……。
麻子　では、遅くなった理由とそちらの方を紹介してください。
喜久枝　はい。
麻子　上がってもらいます？
友久　……。
麻子　その場で。
喜久枝　まず、こちらは徳留篤郎さん。
篤郎　（お辞儀をする）
友久　……。
喜久枝　出版社に勤務されてる方で、今日は上野で洋食をご馳走になりました。
友久　……。
喜久枝　その後、ちょっとお話をしてたらこんな時間になってしまって……。
友久　……。
麻子　さっき尾行とか警察とか言ってたのはなんですか？
篤郎　今日は喜久枝さんをこんな時間まで引き止めてしまい、本当に申し訳ありません。もっと早くおかえしするつもりだったのですが、ちょっと思わぬことになりまして。
麻子　思わぬこと。
篤郎　僕は出版社勤務といっても、あの、社会主義系の出版社に勤めておりまして、先月、過激な活動をしているある団体に我々が発行している雑誌に寄稿をお願いしたところ、当局に目をつけられてしまいまして、それで僕にも時折尾行がつくようになってしまって、それで今日も……。
麻子　ええ！？

篤郎　すみません。
麻子　喜久ちゃんも社会主義の人と思われてるってことですか？
篤郎　それはないと思います。喜久枝さんのようにこんなにモダンな格好をしている社会主義者はいないだろうし、それにおそらく、今日、尾行されたのは、あの、えっと……僕が……女性と……あの、逢い引き、いや、逢い引きじゃなくて、なんていうんですかね……会、話、会話、を、しているのを面白がって、からかい半分にということだと思うんです。
喜久枝　チラッと振り返ったんだけど、イヤ～な笑みを浮かべてた。
篤郎　それでいつも以上に尾行がしつこくて、申し訳ありません、ご自宅の方まで……。
友久　……。
麻子　警察の人はもういないんですか？
喜久枝　地元の利を生かして、抜け道通って振り切ってやったから大丈夫よ。

順平と和子が庭づたいに入ってくる。

順平　なんだ、帰ってきてるじゃん。
和子　喜久ちゃん。
喜久枝　どうしたの？
和子　次郎さんがうちに来て、喜久ちゃん来てませんかって、それで心配で。
喜久枝　そんな大げさよ。
和子　大げさよって何時だと思ってるの？
喜久枝　ごめんなさい。
順平　もう一件落着って雰囲気でもないな。
麻子　はい。
和子　（篤郎に）こんばんは。
篤郎　あ、こんばんは。
和子　喜久ちゃんとはどういうご関係？　という質問はもう終わってる？
麻子　いえ、まだ遅くなった理由だけです。
和子　そう、じゃあ、どういうご関係？
篤郎　関係と訊かれると……。
順平　流行の不純異性交遊だよな？
篤郎　違います、不純だなんてとんでもない、僕は……。
順平　いたって真面目なお付き合いをしている？
篤郎　いえ、お付き合いしているわけでは。
順平　したいとは思っている？
篤郎　えっと……。
喜久枝　あ、そうだ、学校の先生で時々婦人雑誌なんかに書いたものが載ってる知り合いがいるって言ったでしょ？
篤郎　ああ、はい。

喜久枝　こちらの方がその人。
和子　なに、私を紹介してくれたの？
喜久枝　「歩む」っていう雑誌知ってる？
和子　知ってる。社会主義系のよね？
喜久枝　そうそう、その雑誌の人なの。
和子　そうなの？　社会主義には深く傾倒していますよ。
篤郎　どちらの婦人雑誌に書かれてるんですか？
和子　今月だと散文を「婦人社会」に。
篤郎　ああ、その号は読みました。え、もしや、和服に統一しようとする校長に抗議してモダンな格好をして出勤されたという、先生ですか？
和子　ああら、読んでくださったのね。
篤郎　痛快も痛快でとても感銘を受けました。
和子　戦いはまだ続いております。昨日なんて校長は私に対抗して先祖代々の甲冑を身につけて登校してきましたから。ちなみに、私の洋服をつくってくれたのが、あちらの麻子さん。
篤郎　そうですか、そうだったんですか。
麻子　まあ、その話はさておき。
順平　そうだよ、社会主義なんて物騒だぞ。
和子　ちょっと。
順平　（篤郎に）あれだろ？　乗合自動車で喜久ちゃんに見惚れたんだろ？
篤郎　え？
順平　図星だろ？　まあ、制服姿っていうのは普段の二割増しくらいに見えちゃうからな。
喜久枝　ちょっと順平さん、それ、自覚してるんだから。
篤郎　二割どころか、五割六割増しでした。
喜久枝　え？
篤郎　あ。
喜久枝　え、え、え、ということは今日、洋服着てる私に会ってがっかりしたってこと？
篤郎　いや、あの、
喜久枝　なによ、十回も断ったのにそれでも誘ってくるから今日は会ってあげたのに。
篤郎　そういう意味じゃなくて、
喜久枝　実はあなたのお話、とても退屈だったの。資本主義のからくりとか労働問題とかとうとうと話すんだもの、食事が終わってもずっと一方的で、私のことなんて聞こうともしないし。
篤郎　だから、
喜久枝　もういいです。
篤郎　……。

友久はほくそ笑む。

順平・麻子・和子　（友久を見て）笑ってる。
友久　（笑いを押し殺して）笑ってないよ。
順平　喜久ちゃん、十回も断ったんだ。
喜久枝　正確には十二回だけど、今日を最後にしますって言うから、だから会ってあげたんだけど。
順平　最後の機会をしくじったんだな。
篤郎　……。
順平　俺はてっきり、あいつの再婚が気に入らないから夜遊びなんて不良めいたことをしたんだと思ったよ。
喜久枝　再婚？　誰と？
順平　麻ちゃんと、あっ……。
喜久枝　そうなの？　え、そうなの？　そういうことになってるの？
友久　……。
麻子　……。
喜久枝　でも、まあ、薄々気づいてはいたけど。
友久　……。
喜久枝　順平さんには打ち明けたんだ。
順平　すまん。
友久　お前が謝るとそういう話を進めてたみたいだろ。
順平　喜久ちゃん、なんでもない、俺は何も言わなかった。
喜久枝　いや、もう後戻りできないから。
順平　喜久ちゃんがお嫁にいくまでは、お父さんは再婚なんてしないよ。
喜久枝　私がお嫁にいったら速攻で再婚するってこと？
順平　いやあ、どうなんだろう。
喜久枝　そりゃ私だって、お父さんと麻子さんが再婚したらなんて、想像したことはあるけど……。
麻子　……。
友久　……。
喜久枝　地震の時、お父さん、あんなに揺れてたのにぼんやりしたまま、お母さんの位牌を見て、この家が崩れ落ちるのを願っているようだった。
友久　……。
喜久枝　そんなお父さんが元気になったのは、麻子さんがうちで働くようになってからよ、そこは悔しいんだな、娘としては。
麻子　……。
喜久枝　あ、でも、うん、お母さんのことを思うと、複雑な思いになっちゃう。
麻子　……。
喜久枝　みんなで食事してる時なんかお母さんのことを忘れる瞬間があるの、この家でよ、お母さんと暮らしたこの家で、お母さんを忘れるってこんな薄

情なことはないじゃない。
友久　……。
和子　ガハハハハって笑う人だったよね、あやさん。
喜久枝　うん。
和子　今もガハハハハって笑っていそうな気がする。
喜久枝　……そうかも。

喜久枝はあやの仏壇を見て、友久と麻子を見る。

喜久枝　お二人はとても良い雰囲気だと思いますよ。
友久　……。
麻子　……。
喜久枝　本当は麻子さんと結婚したいくせに、娘の前だから照れちゃってるでしょ？
友久　……。
和子　麻子さんは結婚、どう思ってるの？
麻子　え。
和子　遠慮しなくていいから。
麻子　……私は、
篤郎　喜久枝さん！　どうか僕と恋愛してください！　僕が喜久枝さんのことを五割六割増だと言ったのは外見のことではないんです！　普段働いている時とは違うとびきりの笑顔が五割六割増だと言いたかったんです！

少しの間。

順平　え？
篤郎　え？
和子　え？
篤郎　え？
喜久枝　え？
篤郎　え？
麻子　え？
篤郎　え？
順平　君の思いを吐露する話の流れじゃなかったでしょ？
篤郎　でも、
順平　でも、じゃないんだよ、ふざけんなよ、ふざけんなよっ。
篤郎　喜久枝さんの表情を見ていたら思いが溢れ出てしまって、仕方ないじゃないですか。
和子　喜久ちゃん、この人は絶対にやめた方がいい。
喜久枝　うん、今ので確信した。

篤郎　え……。
麻子　……。
友久　じゃ、そういうことで。

友久は出て行こうとする。

順平　おい、逃げるんじゃないよ。
友久　ありがとな、娘を心配してくれて。和子さんも。
和子　友さん。
友久　（篤郎に、笑いを押し殺しながら）君は二度とうちの敷居をまたぐなよ。
篤郎　……。
麻子　結婚してもらいたいです。
友久　……。
麻子　私は結婚してもらいたいです。
友久　……。

麻子と友久の様子をそれぞれがうかがっている時間があって、
暗転。

⑤

前場から二週間後、午前中。
麻子が縁側から屋根の上を見ている。

麻子　（猫を見つけて）……あっ！　……え？　……思ったよりもかわいい。

麻子が屋根の上の猫を見ている時間があって、

麻子　朝鮮の言葉で鳴かないでね……。

佐伯が庭づたいに現れる。

佐伯　うちの猫、きてる？
麻子　え？
佐伯　うちの猫。
麻子　あ、あ、きてますきてます、今、屋根の上に。
佐伯　ああ、そう、やっぱり、きてる。
麻子　（屋根の上を見て）あ……でも、もういなくなっちゃったかな。
佐伯　（屋根の上を見て）そうだね、いなくなったね。

少しの沈黙。

麻子　私、春の半ばにここに来たんですけど、初めて見ました。
佐伯　うちの猫？
麻子　はい。かわいいですね。
佐伯　ありがとう。もう一回言ってくれる？
麻子　え、あ、かわいいですね。
佐伯　ありがとう。
麻子　はあ。
佐伯　そういえば、春くらいからこの辺りに行くことが多くなったんだよね。
麻子　そうなんですか。
佐伯　もしかして朝鮮の料理を作ってる？
麻子　え、いえ、朝鮮の料理は。作り方も知りませんし。
佐伯　うちの女房に朝鮮の料理を作らせてるんだけど、やっぱり見よう見まねだとね、柴田くんも気に入らないみたいだね。
麻子　柴田くん？
佐伯　ああ、うちの猫の名前。
麻子　柴田くん。
佐伯　うん。最後にもう一回言ってくれる？
麻子　かわいいですね。
佐伯　ありがとう。

佐伯は去っていく。

麻子　……。

武晴が下手から現れる。

武晴　今、佐伯さん、来なかった？
麻子　はい、あ、私、初めてみました、佐伯さんの家の猫。
武晴　おお、ついに。
麻子　虎を想像していたんですけど、小さくてかわいらしくて。
武晴　虎と比べりゃそりゃね。
麻子　猫の名前、柴田くんていうんですね、誰も教えてくれなかったですよ。
武晴　ああ、柴田くんなんて親しみのある名前でみんなあいつを呼びたくないからね。
麻子　そういうことですか。
武晴　佐伯さんが一緒に戦った戦友の名前なんだよ。朝鮮で亡くなったらしいよ。そのせいで佐伯さんは朝鮮人への嫌悪が凄くてさ、震災の時なんて本当

に頼りになったけど、そこまでやるのかって……。
麻子　そこまでやるのかって？
武晴　震災の話はやめとこう。
麻子　この町内にも朝鮮人が逃げてきたんですね。
武晴　いや、そんなことはないけど。
麻子　そうですか。
武晴　うん。
麻子　……。

と、屋根の上で足音がして、

麻子　あ、戻ってきましたね。

と、麻子は屋根を見ると、二階へと上がっていく。

武晴　……。

そこへ、りゑが一升瓶を持って庭づたいに現れる。

りゑ　佐伯さんちの猫？
武晴　え？
りゑ　いるの？
武晴　そう、足音がしてさ、気をつけてね。
りゑ　そうね、背後から飛びかかられるかもしれないしね。
武晴　朝鮮の猫ってみんなあんなに凶暴なのかな。
りゑ　日本人を憎んでるんじゃないの。
武晴　佐伯さんが一番憎まれてるかもね。
りゑ　（一升瓶を差し出して）これ、麻子さんに渡しといて。昨日ちょうど混んでた時でさ、後にしてもらったの。
武晴　（一升瓶を受け取る）ああ。
りゑ　友さん、結婚を渋ってるんだって？
武晴　ああ、さっさと結婚しちゃえばいいのに。なんだかはっきりしないんだよな。
りゑ　怖がってるのかもね。
武晴　怖がってる？
りゑ　友さんは麻子さんのことをとても好きでしょ。
武晴　抑えようとしてるけど漏れ出てる。
りゑ　あやさんのこともとても好きだったでしょ。
武晴　亡くなった時の友さんの落ち込みようといったら。
りゑ　あんな思いは二度としたくないから、踏み込めないんだよ。

武晴　……。
りゑ　……。
武晴　今のは、俺に対しての牽制でもあるのかな。
りゑ　……。

少しの沈黙。

武晴　そろそろかなって思ってるんだよ、いつまでも雇われ職人のままっていうのもあれだから、自分の店を出そうかと。
りゑ　……。
武晴　……一緒にどうかなと思って。
りゑ　……。
武晴　一緒に店をやってくれたらいいなと思って。
りゑ　……やっぱり。
武晴　やっぱり？
りゑ　言われるんじゃないかと思った、いや、思っていた。
武晴　……。
りゑ　だから、考えていた。
武晴　……。
りゑ　……。
武晴　早かったかな。
りゑ　早いよ、とっても早い、早すぎるくらい。
武晴　申し訳ない。
りゑ　でも、武ちゃんがいたから私は生き延びてると思う。
武晴　……。
りゑ　心配なことがあってさ。
武晴　うん。
りゑ　もし、あの子が家に帰ってきた時に、私がいなかったら、また私を探してどこかへ行ってしまうんじゃないかって思うんだよ。自分でも呆れるくらい、いつもこの答えにたどり着く。
武晴　……。
りゑ　うちに来てよ。
武晴　え？
りゑ　武ちゃんがうちの醤油屋を継ぐの。
武晴　……。
りゑ　できる？
武晴　……。
りゑ　それが一緒になる条件。
武晴　……。
りゑ　考えてみて。

武晴　……。
りゑ　それじゃ、お醤油、お願いね。
武晴　……。

りゑは庭づたいに去っていく。

武晴　……。

麻子が二階から下りてくる。

麻子　（どこかぎこちない）あらあらあらあら、武晴さんがお醤油を持っているじゃありませんか。
武晴　ああ……。
麻子　（どこかぎこちない）もしかして、りゑさんが届けてくれたのかしら？
武晴　……。

武晴は一升瓶を麻子に渡す。

麻子　（どこかぎこちない）ありがとうございます。
武晴　聞いてたでしょ？
麻子　（ゆっくりうなずく）
武晴　……。
友久　実は俺も。

と、友久が台所の方から現れる。

武晴　……。
次郎　実は僕も。

と、次郎が店の方から現れる。

武晴　……。

武晴はキョロキョロする。

麻子　喜久ちゃんはお仕事に行きました。
武晴　……。
友久　独り立ちを考えてたんだな。
武晴　ええ、まあ。
友久　お前がいなくなったらこの店、終わるぞ。

武晴　……。
友久　だから、お前の店で俺を雇ってくれ。
武晴　は？
友久　親方。
武晴　あのね。
友久　俺もお前の歳くらいに独立してこの店を持ったんだから、いいと思うよ。
武晴　意外にあっさりですね。
友久　去る者を追っても仕方ないだろ。
武晴　……。
友久　本当は引き止めたいんだぞ。
武晴　……。
友久　え、でも、すぐにってわけじゃないんだろ？
武晴　大家には早くしてくれって急かされてはいるんです。
友久　ええー、そうなの？　どこでやるつもりなんだよ？
武晴　湯島の方に良い空き家があって。
友久　ああ、近くっちゃ近くだな。
武晴　でも、お客さんの取り合いにはならないと思いますよ。
友久　そうだな、いや、でも、ほんとにすぐには困る。まだ次郎が……。
次郎　大丈夫ですよ、りゑさんに断られてましたもんね。
武晴　（ズンと落ち込む）……。
次郎　あ。
麻子　次郎さん。
次郎　本当のことだし。
友久　うちを継げって、りゑも大胆な提案をしてきたよな。
次郎　まあ、とりあえず醤油屋を継ぐって言って、徐々に徐々にミシンとかアイロン台とかを置いていって、時間をかけて醤油屋をテーラーにしていくのがいいかなと思いますけどね。
友久　うちの隣でテーラーやられてもな。
次郎　そうなったら、うちと合体すればいいだけの話ですよ。
武晴　友さんと麻ちゃんはどうなんですか？
友久　……。
麻子　……。
武晴　いい機会だから、今、決めちゃいましょうよ。
友久　……。
武晴　早くしないと、あの新聞記者の人が何をするかわからないですよ。あの人、奥さんの服だけじゃなくて、妹、従姉妹、姪っ子、母、祖母の洋服を作ってくれって、言ってきてるんですよ、ね。
麻子　そうですね。
武晴　妻帯者だからって油断はならないし、愛人にしようとしてんじゃないかな。

友久　……。
次郎　たしかに、いつまでもはぐらかしてちゃあ、麻さんだっていい歳なんだし。
麻子　そうですね、いい歳ですね。
次郎　今、二人で話して決めたらどうですか？
武晴　それがいいよ、決めるまでは店に出なくていいですから。
友久　勝手に決めるんじゃないよ。
次郎　大丈夫ですよ、店の前は夏休みで浮かれたガキたちが騒いでるだけだし。
友久　それのなにが大丈夫なんだよ。
武晴　じゃ、そういうことで。

武晴と次郎は、友久と麻子を残して店へと出て行く。

友久　……。
麻子　……。
友久　醤油、置いてこようか？
麻子　逃げるでしょう？
友久　逃げないよ。
麻子　醤油の置き場所、分かりますか？
友久　……。
麻子　私が持っていきますから。
友久　俺に持って行かせてよ。

と、一升瓶を、それぞれの外側の手は瓶底、奥側の手は瓶口を持ち、二人で一升瓶を持っている状態になる。

麻子　……。
友久　……。
麻子　大丈夫ですよ。
友久　え？
麻子　私は体が丈夫で風邪のひとつもひいたことがないんです。
友久　……。
麻子　このお醤油を飲み干したってけろっとしていますよ。
友久　……ちょっとごめんね。
麻子　え？

と、友久は店と居間を仕切る障子戸を叩く。武晴と次郎の「おっわわわあ！」という声が聞こえる。友久は戻ってきて一升瓶を持って、友久と麻子は先ほどの状態に戻る。

麻子　戻った。
友久　……。
麻子　私が朝鮮人だと誰にも話さないでいてくれてありがとうございます。
友久　……。
麻子　私のことを愛してはいませんか？
友久　……。
麻子　それともやはり朝鮮人だから？
友久　……。
麻子　……。
友久　日本の戸籍に入りたいだけじゃないの？
麻子　……。
友久　この前、結婚したいって言われた時にそう思ったんだよ。
麻子　……。
友久　俺じゃなくてもいいんじゃないかな。
麻子　愛していますと私は伝えました。
友久　なにも感じなかったわけで。
麻子　……。
友久　朝鮮人としての生きづらさはあるんだろうけど、そんなに日本語ができるなら、特に生活に支障はないような気がするんだけど。
麻子　……。
友久　……。
麻子　お醤油、置いてきますね。

と、麻子は一升瓶を持って出ていく。

友久　……。

友久がひとりの時間が少しあって、
大木が庭づたいに現れる。

大木　どうも。
友久　店に用なら玄関の方から入っていただきたいんですが。
大木　麻子さんに用があるので、どうせこちらの方に来ると思いまして。
友久　たしかにそうですね。

麻子が台所から戻ってくる。

麻子　……。
友久　……。
大木　おはようございます。

麻子　ああ、おはようございます。
大木　妹の洋服を受け取りに来ました。
麻子　わざわざお越しくださってありがとうございます。少々お待ちください。

麻子は二階へ上がっていく。

友久　……。
大木　もしかして、お二人はいい雰囲気なんですか？
友久　どうでしょうね。
大木　今のお二人の目線のやりとりでそういうのを読み取りました。
友久　……。
大木　そうですか、灯台下暗しとはこのことですね、気がつきませんでした。
友久　……。
大木　でも、入り込む余地はありそうですね。
友久　妻帯者じゃないんですか？
大木　それがなにか？
友久　なにかって不謹慎じゃないですか。
大木　誰に対して？
友久　奥さんに対してです。
大木　妻はむしろ応援してくれていますよ。
友久　は？　離婚するつもりですか？
大木　誰が？
友久　大木さんがです。
大木　どうして？
友久　離婚しなきゃ結婚できないでしょう？
大木　は？

麻子が二階から風呂敷（洋服を包んでいる）を二つ、持って下りてくる。

麻子　大木さん、お待たせしました。妹さんのお洋服、（ひとつの風呂敷を広げ、洋服を見せて）こちらでよろしいでしょうか。
大木　（洋服を見て）いいですね、とてもいいですね、妹が喜ぶ姿が目に浮かびます。
麻子　ありがとうございます。
友久　……。
麻子　親方。
友久　ん？
麻子　私、木村さんのところに納品に行ってきます。
友久　ああ、そう、いってらっしゃい。
麻子　いってきます。

麻子はもう一つの風呂敷を持って店の方から出ていく。

友久　……。
大木　もしかして、僕が麻子さんと結婚しようとしてると思っていますか？
友久　違うんですか？
大木　僕じゃなくて、いい歳をして独身の従兄弟がいましてね。
友久　ああ、なんだ、そうなんですか、失礼しました、安心しました……ん、安心していいのか……。
大木　でも、お二人がそんな関係だとは知らず、婚前調査するよりも先に知るべきでしたね。
友久　婚前調査？
大木　ええ。
友久　麻ちゃんの身元を調べたんですか？
大木　調べている、ですね、正確には。興信所に頼んでいるんですがまだ途中で。
友久　途中。
大木　気になりますか？
友久　そりゃ気になりますよ。
大木　……。
友久　もしかして、もうあのことは知っているんですか？
大木　石崎さんも知っているんですね。
友久　それでも縁談を？
大木　日本人は積極的に朝鮮人と結婚して日本人に同化していくべきだという政府の内鮮融和の考え方には共感しています。
友久　……。
大木　でも、まだ途中ですから、知らないこともまだまだありますから。
友久　……。
大木　……。

順平が庭づたいに原稿用紙と鉛筆を持って現れる。

順平　おっ、大木くん、よく会うね。
大木　そうですね。
友久　なんだよ、うちで書くんじゃないよ。
順平　不調でね、ちょっと気分転換に。
友久　背広でも新調してくれればな。
順平　うちの女房が洋服をたくさんお願いしたでしょ？
友久　ああ、そうでした。
順平　同僚の先生の洋服もこちらでお願いしたでしょ？

友久　別にお前の手柄じゃないからな。
順平　大木くん、なにか面白い記事ない？　小説の種になりそうな。
大木　そうですね、運送屋の五十嵐作造君がどら焼き屋の看板娘、中田君子さんに恋をして、百日毎日どら焼き屋に訪れたら結婚するという約束をとりつけたものの、最後の百日目の目前でどら焼き屋が潰れてしまい途方に暮れる五十嵐君に、今度はおでん屋さんだよと君子さんが現れ、今度は百日間おでん屋に通ってめでたく結婚したという話はどうでしょう？
順平　五十嵐君が気の毒すぎるよ、本当の話？
大木　面白い記事がなかったんで、今、僕が適当に。
順平　もっとマシな話にしてくれよ。

と、突然、店の方から麻子が駆け込んでくる。麻子はその勢いのまま、庭へ出て行く。その後に麻子を追って和子が入ってくる。その後に武晴と次郎がどうしたどうしたという感じで入ってくる。

麻子　……。
和子　……。
友久　……。
大木　……。
順平　どうした？
和子　麻子さんがひっぱたいたの、この店の前で遊んでた子供たちを全員。
順平　え。
和子　うちの佐吉とせつ子もいた。
順平　……。
友久　……。

少しの沈黙。

和子　麻子さん、ありがとう。
麻子　……。
和子　私も見かけてやめさせようと思っていたところだったから、
麻子　……。
和子　でも、ひっぱたくのはやりすぎだったと思う、手加減もせずに、思いっきりやるなんて。
麻子　……。
順平　え、なんでそんなことしたの？
和子　佐伯さんとこの猫に向かって、みんなで石を投げてたの。
順平　あああ、それで……え？　麻ちゃんが、本当に？
和子　そう、思いっきり。
麻子　……すみませんでした。

和子　……。
麻子　店の前で、騒がれると迷惑だったので、石も危なかったし。
和子　そうね、その通りよ。
次郎　あの猫じゃあ、俺も一緒に石を投げちゃいますけどね。
武晴　次郎。
麻子　私も一緒に石を投げるべきでしたね……。
和子　……大丈夫？　何かあったの？
麻子　……。
順平　これ、あれだな、石を投げたのを佐伯さんに知られたら厄介なことになるぞ、下駄屋の森さんなんてあの猫を箒で叩いたのをバラされて、佐伯さんに日本刀を持って詰め寄られたんだから。
武晴　話を聞いて震え上がりましたよ。
順平　石は猫に当たってないよな？
和子　そんなことはどうでもいいの。
順平　え、でもなあ。
和子　うるさいな。
順平　……。
和子　あの子たちになにかされた？
麻子　ああ……いえ、そんなことは……。

少しの沈黙。

友久　……。
和子　……。
麻子　順平さん、和子さん、申し訳ありませんでした。あとで、佐吉くんとせっちゃんにも謝りにいかせてください。
和子　……。
麻子　……私、納品があるので、失礼します。

麻子は出て行こうとするが、

和子　あっ、麻子さん。
麻子　……。
和子　校長との戦い、私たちの勝利よ。最後は女教員が団結して洋服を着ていったの、それで校長もついに降参。
麻子　……。
和子　麻子さんの作った洋服だからみんなが着てくれた、麻子さんのおかげだよ。
麻子　それがなんだっていうんです？
和子　え……。

麻子　それがなんだっていうんです？
和子　……。

少しの沈黙。

麻子　あ……すみません、本当にすみません。
和子　……。
友久　……。
麻子　親方。
友久　ん？
麻子　納品、一緒に行ってもらえないでしょうか。
友久　……。
麻子　……。
友久　うん。
麻子　……。

出ていく麻子と友久をそれぞれが見つめている時間があって、
暗転。

⑥

前場から一週間後、夕暮れ。
喜久枝が縁側に腰掛け、団扇を扇いでいる。

喜久枝　……。

そこへ、風呂敷に包んだ木箱を抱えた篤郎が悲愴な面持ちで庭づたいに現れる。

喜久枝　え。
篤郎　……。
喜久枝　……ご家族でも亡くなったの？
篤郎　は？
喜久枝　それ、骨壺じゃなくて？
篤郎　違う違う。
喜久枝　ああ、そう、とても悲しそうにしてるから。
篤郎　……。
喜久枝　キャー！

篤郎　は？
喜久枝　悲しい表情に気をとられちゃったけど、なんでなんでなんで、
　来ちゃったのよ！？
篤郎　（しーっと指を口にあてる）
喜久枝　え、また尾行されてるの？
篤郎　ごめん、この前、来た時にうまく巻けたから同じ道を辿ったんだよね、
　だから最終的に喜久枝さんのお家に。
喜久枝　そういうことか。
篤郎　え、家の人は？
喜久枝　近くの神社で縁日やってるから、今日は早めに店終いして、みんな行
　っちゃったみたい。
篤郎　みたい？
喜久枝　書き置きがあったの。
篤郎　良かった。
喜久枝　良くないよ、こっそり会ってたなんて知られたら。
篤郎　そうだよね、ごめん、でも、今回は本当にどうしようもなくて。
喜久枝　（風呂敷包みを指して）それ？
篤郎　そう。
喜久枝　なに、それ？
篤郎　過激な集団に原稿を頼んだことがあるって言ったでしょ？
喜久枝　うん。
篤郎　今日も原稿をもらいに行ったんだけど、突然これを持って逃げろって強
　引に渡されてさ、
喜久枝　それなに？
篤郎　彼らは何度も実験してるって言ってた。
喜久枝　え、それなに？
篤郎　これも試作品のひとつかもしれない。
喜久枝　だからそれなに？
篤郎　何もしなければ爆発するなんてことはないって。
喜久枝　え。
篤郎　ごめん！

　喜久枝は篤郎から離れる。

喜久枝　そんなものを私に預けようとしてるの！？
篤郎　預けるなんてそんなつもりは、
喜久枝　私、嬉しいよ。
篤郎　は？
喜久枝　そんな命がけで愛を表現されたら。
篤郎　いや、そんな歪んだ愛情表現では。

喜久枝　警察に届けるわけにはいかないの？
篤郎　届けても彼らの一味として逮捕されるに決まってるし。
喜久枝　逮捕。
篤郎　本当に申し訳ない、どうして僕は喜久枝さんのところに。
喜久枝　本能がそうさせたのかもね、命の危険を感じて、最後に誰に会いたいかって。
篤郎　最後って。
喜久枝　ドキドキするね、この近づきたいけど近づけない感じ。
篤郎　……。

そこへ、次郎が下手から入ってくる。

次郎　え。
喜久枝　あ。
篤郎　どうも。
次郎　おわっ！
篤郎　徳留篤郎です。
次郎　徳留、篤郎……あっ、えっ、うちで逢い引きするなんて随分大胆だね。
喜久枝　……。
次郎　俺たちの知らないところで会ってたんだね。
喜久枝　縁日に行ったんじゃなかったの？
次郎　昨日、夜更けまで作業してたから、あまりにも眠くてさ、行かなかった。
喜久枝　そう。
次郎　（篤郎の風呂敷が目に入り）それ、おはぎのお重かなにか？
篤郎　そうなんです、僕の母親がご挨拶にって。
喜久枝　ちょっと！　おはぎじゃないでしょ！
篤郎　……。
次郎　違うの？
喜久枝　（口パクで「爆弾」と伝える）。
次郎　は？
喜久枝　だから……（さっきより大きく口を開けて口パクで、「爆弾」と伝える）。
次郎　（喜久枝の口パクを受けて）……カ、二、さ、ん？
喜久枝　違う、爆発するやつ。
次郎　ば、く、……え！　え！　え！　警察、呼ばないと。
喜久枝　警察は呼んでほしくないの、彼が逮捕されちゃうから。
次郎　逮捕されればいいじゃん。
喜久枝　そこは事情を汲み取ってよ。
次郎　事情？
篤郎　すみません！　僕がちょっと過激な団体から渡されてしまって、どうしようもなく持ってきてしまったんです。願いします、助けてください！

次郎　助けろって、どうすればいいんだよ？
篤郎　ちょっとの間でいいので、置いていただけると。
次郎　置く？
篤郎　はい。庭園の石みたいな感じで、その辺りに置いてもらえればいいと思うんですけど。
次郎　いや、ダメでしょ。
篤郎　でしたら、あの、縁側の、
次郎　何を言われてもさ、素人にはどうしようもないよ。
篤郎　……。
次郎　君さ、俺はよくわかんないけど、喜久ちゃんのことが好きなんでしょう？
篤郎　はい……。
次郎　そんなものを持ってきて命がけの愛を表現してる気になってるかもしれないけど、
篤郎　いや、だからそんな歪んだ愛情表現では。
次郎　もしかしたら大変なことになって喜久ちゃんが怪我して……いや、死んでしまっていたかもしれないんだよ。
篤郎　……。
次郎　警察は呼ばないから、喜久ちゃんを思うなら、持って帰って。な。
篤郎　……おっしゃる通りです。失礼しました。
喜久枝　……。
篤郎　喜久枝さん、ごめんなさい。
喜久枝　……。

篤郎は風呂敷に包まれた木箱を持って庭づたいに出ていく。

次郎　意外に聞き分けが良かったな。
喜久枝　大丈夫かな。
次郎　心配なんてしなくていいんだよ、とんでもないやつだよ。
喜久枝　そうだね……。
次郎　親方には内緒にしておくからさ、二度と会うんじゃないよ。
喜久枝　はい……。
次郎　まったく。
喜久枝　みんなが縁日に行ってて良かった。
次郎　ほんとだよ。

少しの沈黙。

喜久枝　縁日、麻子さんも行ったんでしょ？
次郎　麻さんは買い出しがあるからって生地屋に行ったよ。
喜久枝　そう、麻子さん、あれ以来元気がないから、一緒に行ってほしかった

な。
次郎　気にしなきゃいいのにな。
喜久枝　ね。
次郎　諸悪の根源はあの猫だけどね。
喜久枝　次郎さんはさ、佐伯さんちの猫が実際に誰かに危害を加えるの見たことある？
次郎　ああ、そう言われると、ないかも。
喜久枝　私も見たことないの。やられたって話はたくさん聞くんだけど、武晴さんもりゑさんも実際に見たことはないって言ってて。
次郎　まあ、でもやられてる人はいるんだから、不逞猫だよ。

りゑと武晴と友久と順平が店の方から入ってくる。

順平　武晴が切られた！
喜久枝　え？
りゑ　武ちゃんの背中、ほら！

りゑの言うように武晴の浴衣は背中を大きく切られている。

喜久枝　うわっ、背中をざっくりじゃん、怪我は？
武晴　大丈夫だよ。

と、武晴はなんでもないよという風に卓袱台に腰を下ろす。

喜久枝　喧嘩でもしたの？
りゑ　ううん、屋台をまわってたら急に武ちゃんが「切られてるっ」って騒ぎだして。
武晴　いやあ、驚いちゃったなあ。
友久　着替えろよ。
武晴　逆に背中がスースーして涼しいですよ。
りゑ　なにを強がってんのよ。
武晴　裁縫職人の浴衣を切ろうなんていい度胸してるよ、すぐに縫い直してやるよ。
りゑ　震えてるよ。
武晴　震えてないって。

順平は卓袱台にあった茶碗を武晴に持たせ、急須でお茶を注いでいく。
武晴の手が震えてお茶が卓袱台にこぼれて、それぞれ「ああああ」と声を出す。喜久枝がこぼれたお茶を拭く。

武晴　ほら、全然。
りゑ　こぼれてるでしょうが。
次郎　武晴さん、着替えましょう。

友久と次郎は武晴を連れて行く。

喜久枝　いつの間にか切られてたってこと？
りゑ　そう、ハサミかなんかを帯から入れて上にダーっといかれたんだと思う。
喜久枝　うわっ。
りゑ　武ちゃんって人から恨みを買うような人だっけ？
喜久枝　まあ、言い方がちょっとって時はあるけど、そんな切られるほどでは。
順平　神社に巡査がいてすぐに駆けつけてくれたけど、あんなに人がいたんじゃ犯人を捕まえるのは無理だろうな。
喜久枝　この界隈はなかなか平和なところなのに。
順平　この間の放火の犯人もまだ捕まってないしな、朝鮮人の復讐だなんて噂もあるよ。
喜久枝　復讐って？
順平　もうすぐ震災の日でしょ？　神経質になってる人もいるから。
喜久枝　去年の震災の時もそういう噂があって、結局何もなかったじゃん。
順平　でも、今年は放火があったからな、もしかしたら、今日も。
喜久枝　えええええ、武晴さんを狙って、朝鮮人が？
りゑ　男なら誰でもいいんだよ。
喜久枝　ああ、そうか、そういうことか。

少しの沈黙。

喜久枝　あのさ、私、震災の時、一番上の棚から反物が落ちてきて足に当たって、手当してもらって何日も順平さんのところで安静にしてたでしょ？　だから、外で起きていたことは聞いた話でしかないんだけど……本当にさ、うちの自警団は朝鮮人を殺さなかったんだよね？
順平　……。
喜久枝　違うの？
順平　違う。
喜久枝　え。
順平　殺さないどころか、見もしなかったんだから。
喜久枝　そうだよね。
順平　……。

佐伯が庭づたいに現れる。佐伯は先ほど篤郎が持ってきた風呂敷に包まれた木箱を手に持っている。

喜久枝　あっ。
佐伯　うちの猫、きてる？
順平・りゑ・喜久枝　（バラバラに）今日は来てないです。
佐伯　いつも思うんだけどさ、バラバラだよね。
順平　え？
佐伯　僕がさ、訊くじゃない、うちの猫きてるって。
順平　はい。
佐伯　そのみんなの返答がバラバラなんだよね、声を合わせてくれてもいいじゃない。
順平　ああ。
佐伯　努力してもらえるとありがたいんだけど。
順平・りゑ・喜久枝　（バラバラに）すみません。
佐伯　……。
喜久枝　（木箱を指して）それ……。
佐伯　ああ、これ、庭の入口に置いてあったよ。
喜久枝　……。
佐伯　これ、おはぎのお重かな？
喜久枝　さあ。
佐伯　さあって石崎さんの物じゃないの？
喜久枝　違いますね。誰か忘れていったんですかね？
佐伯　じゃあ、戻しておこうか。

佐伯は木箱の風呂敷を元に戻す。

喜久枝　……。
佐伯　金澤さん、先週さ、
順平　ああ、あの、うちの子供たちは、柴田くんに石を投げつけたりしてないです。
佐伯　え？
順平　あ。
佐伯　柴田くんに石を投げつけた子供がいたんだ。
順平　あああああああ、なんかなんだか人づての人づてに聞いて聞いた話の話ですけど、そうみたいですよ。
佐伯　……。
順平　先週、なにかありました？
佐伯　「新報時事」で金澤さんの短編が掲載されたでしょう？
順平　ああ、はい。
佐伯　穏やかに生活していた主人公が物語の終盤で、急に鉄の棒を振り回して家中の物を壊し始めて、家中を滅茶苦茶にした後に外に飛び出して、見知ら

ぬ通行人を鉄の棒で殴って殴って殴り続けてそのまま物語が終わってしまったんだよね、あれはついていけなかったねえ。
順平　あの結末は書かなくてもいいのにどうしても書いてしまったもので書きたくて書いたわけじゃないけどそれを書かせたのは夏の暑さだということなんです。

少しの間。

佐伯　え、どういうことか分かった？
りゑ・喜久枝　（バラバラに）分からなかったです。
佐伯　やっぱり揃わないねえ、精進してくださいよ。

佐伯は庭づたいに去っていく。
般若心経を唱える武晴の声が聞こえてくる。

順平　あいつ、大丈夫か。

りゑと順平は下手へ出ていく。
喜久枝は佐伯が置いていった木箱の風呂敷の方を見ている。
すると、麻子が買い出しにいった際の荷物と木箱の風呂敷を持って、庭づたいに入ってくる。

喜久枝　え……。
麻子　戻りました。
喜久枝　……。
麻子　どうしたんですか？
喜久枝　……。
麻子　ん？
喜久枝　（木箱の風呂敷を指して）それ、そっと地面に下ろしてもらってもいい？
麻子　これですか？
喜久枝　そう、そっとよ、そっと。
麻子　何が入っているんですか？
喜久枝　とにかく、下ろしてもらって、下ろしたら、すぐに離れてもらえる？
麻子　はあ……。

麻子は喜久枝に言われた通りに、そっと地面に置いて素早く離れる。

麻子　なんですか、まさか爆弾でも入ってるんですか？
喜久枝　（うなずく）

麻子　え……。
喜久枝　どうしよう。
麻子　どうしようって警察を呼んでくるしかないじゃないですか！？
喜久枝　そうよねそうよね。
麻子　あ、でも、他の人が触ったりするかもしれないから、私、警察に届けてきますよ。
喜久枝　いいの？
麻子　え、とりあえず、なにかを押したりしなければ大丈夫ですよね？
喜久枝　わかんないわかんない。
麻子　え。でも、なんで、そんなものがここに？
喜久枝　あの社会主義者の人、覚えてる？
麻子　ああ、はい。
喜久枝　あの人が勝手に置いてったの。
麻子　（疑いの目）……。
喜久枝　内緒で会ってたとかじゃないから。
麻子　とにかく届けてきますね。
喜久枝　私も行く。
麻子　ひとりで大丈夫ですよ。
喜久枝　でも、
麻子　もしものことがあったら、
篤郎　すみません。

と、篤郎が店の方から現れる。

篤郎　ただ置いておくだけなら爆発したりしないそうですから。
喜久枝　え？
篤郎　よろしくお願いします。

篤郎は去っていく。

喜久枝　ちょっと待ちなさいよ！

と、喜久枝は篤郎を追って出ていく。

麻子　……。

麻子が木箱の風呂敷を見ている時間があって、
大木が慌てた様子で庭づたいに現れる。

大木　どうも。

麻子　どうも。
大木　……。
麻子　どうしました、姪っ子さんにお洋服を急かされましたか？
大木　家には誰かいらっしゃいますか？
麻子　いると思いますよ、奥が騒がしいようだから。
大木　ちょっと僕と外に行きませんか？
麻子　なんでしょう？
大木　いえ、聞かれると、麻子さんにとっても良くないかと思って。
麻子　……。
大木　行きましょう。
麻子　ここでかまわないですよ。
大木　でも……。
麻子　なんですか？
大木　じゃあ、ちょっと……。

と、大木は麻子を庭の前方へ誘導する。

大木　僕が麻子さんと従兄弟の縁談を持ちかけようとしていたのはご存知ですか？
麻子　ええ、なんとなくは私の耳にも。
大木　とりやめることにしました。
麻子　え、わざわざそれを言いに？
大木　婚前調査として麻子さんの身元を調べさせてもらったんです。
麻子　……。
大木　そこである事実を知って取りやめることにしたんです。
麻子　……。
大木　麻子さんには朝鮮人の恋人がいて、震災の時に離れ離れになってしまった。

少しの沈黙。

麻子　婚前調査はそこまで調べるんですか？
大木　いえ、興信所がある程度まで調べたところを僕が引き継いだんです。
麻子　先ほどのおっしゃりようだと、私が朝鮮人であることは以前から知っていたんですね。
大木　ええ。
麻子　……。
大木　この店で働くようになった理由を教えてくれませんか？
麻子　生活のためです。
大木　本当の理由です。

麻子　本当の理由？　大木さんの方がご存知なんじゃないですか？
大木　……キム・ホンシクくんに会いました。
麻子　……。
大木　恋人の、ヨンテクさんの、工場仲間の。
麻子　わかっていますよ。
大木　……。
麻子　ホンシクは生きていたんですね。
大木　……。
麻子　ホンシクに何を訊いたんですか？
大木　ヨンテクさんがここの自警団に殺されたことを。
麻子　殺されたとホンシクは言ってましたか？
大木　ええ。
麻子　……。

少しの沈黙。

麻子　やはり殺されていたんですね。
大木　えっ、もしかして、知らなかったんですか？
麻子　たしかに一緒にこの町へ逃げてきましたが、私はヨンテクの遺体を見ていない、私はヨンテクを見捨てたんですから。
大木　……。
麻子　殺されただろうとは思っていましたが、ようやく、確信することができました。
大木　……。
麻子　ホンシクはなんと言ってましたか？
大木　話さない方がよさそうですね。
麻子　話してください！
大木　……。

大木は家の中を気にするが、誰かが出てくる様子はない。麻子は昂っているせいか、気にしていない。

大木　ホンシクくんと麻子さんとヨンテクさんはこの町で自警団から逃げている途中に離れ離れになってしまったんでしょう？
麻子　そうです、ホンシクひとりと、私とヨンテク。
大木　ホンシクくんはこの町内を離れ、保護してもらおうと警察署に向かったそうなんですが、途中でまた別の自警団に出くわして、この町内に戻ってきたそうです。その時、道端で倒れているヨンテクさんを見つけたそうです。
麻子　……。
大木　ヨンテクさんは……。

麻子　……。
大木　聞きたいですか？
麻子　聞かせてください。
大木　もう息はなく……顔中身体中に殴られた痕や斬られた痕があり、着ていた白いシャツはボロボロに破れ、赤く染まっていたそうです。
麻子　……。
大木　その後、ホンシクくんは別の警察署へ向かい、ようやく保護されたそうです。警察署でも酷い扱いをされたそうですが……。

少しの沈黙。
麻子は涙をこらえている。

麻子　……。
大木　……。
麻子　そんなに慌てていらっしゃったのは、今にも私がこの町内の誰かを殺すかもしれないと思ったからですか？
大木　……。
麻子　私を説得するつもりで？
大木　分かりません、事情を知った途端に慌ててきてしまいました。
麻子　今の事情を警察に話せば、きっと私は逮捕されると思いますよ、朝鮮人が自警団の元に忍び込み、復讐をしようとしているかもしれないんですから。
大木　……。
麻子　それとも、今、大木さんがこの場で私を殴り殺しますか？
大木　……。
麻子　……。

武晴が勢いよく出てきて店の方から出ていく。

麻子・大木　……。

武晴を追って、次郎、りゑ、順平が現れ、そのまま店の方から出ていく。

麻子・大木　……。

友久が現れる。

友久　あ。
麻子　（涙をこらえている）……。
大木　どうも。
友久　どうも。

麻子　どうしたんですか、みなさん、大急ぎで出ていきましたけど。
友久　え、あ、武晴がちょっと縁日で酷い目にあってさ。
麻子　え。
友久　さっきまで落ち着いてたんだけど、急に犯人探してきますって出ていっちゃって。
麻子　犯人？
友久　詳しいことは後で話すよ。
麻子　はあ。
大木　……僕はこれで。
麻子　ああ、はい。

大木は庭づたいに去っていく。

麻子　（涙をこらえている）……。
友久　……大木さん、どうかしたの？
麻子　姪っ子さんのお洋服がまだ仕上がってないのに、姪っ子さんに急かされたそうで、生地がないからすぐには無理だとお断りしたところだったんです。
友久　……ああ、本当に？
麻子　ええ。
友久　姪っ子をかわいがってるんだな。
麻子　言いなりだっておっしゃってましたよ。
友久　大丈夫？
麻子　（涙をこらえている）大丈夫ですよ……。
友久　……。
麻子　……。
友久　……大木さんから縁談の話は聞いてるの？
麻子　ええ、でも、あちらから取りやめたそうです。
友久　取りやめた？
麻子　きっと私が朝鮮人だからでしょうね。
友久　……。
麻子　正式に縁談を持ち掛けられてもお断りしましたけどね。
友久　……。
麻子　私は親方が……。

麻子はその場にうずくまる。麻子は泣いている。

友久　何があったの？
麻子　ささいなことですよ。
友久　話してもらえる？
麻子　話しても、親方には受け止められないでしょうね。

友久　……。
麻子　私と結婚してもらえませんか？
友久　……。
麻子　私と結婚してもらえませんか？
友久　……。
麻子　……。
友久　わかった、結婚しようか。
麻子　……ありがとうございます。
友久　……。
麻子　……親方。
友久　ん？
麻子　皆さんに私が朝鮮人だと話してもらってもいいですか？
友久　……いいの？
麻子　いつかは言わないといけないですし。
友久　わかった。
麻子　……。
友久　武晴を見てくるよ。
麻子　はい。

友久は店の方から出ていく。
麻子はゆっくりと立ち上がる。

麻子　……。

麻子が木箱の風呂敷を見る時間があって、
暗転。

⑦

前場から二週間後、夕暮れ。
和子が今か今かと誰かを待っている様子で縁側をウロウロしている。
卓袱台には酒の一升瓶と枡がいくつか置かれている。
大木が庭づたいに現れる。

和子　あっ！

と和子が言うと、家のあちらこちらから、人が出てきそうな気配がする
（障子戸が開きそうになったり、階段や上手下手の出口から足音が聞
こえたりする）のだが、

和子　違った違った、人違い！

と、周囲に言うと、出てきそうな気配はピタリとなくなる。

和子　大木さんだった。

出てきそうな気配を起こしていた人たちの「なんだよ」みたいなぼやきがなんとなく聞こえてくる。

大木　なんですか？

和子　二人が婚姻届を提出しに行ったんですよ、結婚式はやらないっていうから、内緒でお祝いしてあげようとしてるんです。

大木　ああ、みなさん、隠れているんですか？

和子　そうなんですよ。

大木　僕は母の洋服を受け取りにきたのですが。

和子　もうすぐ帰ってきますから、一緒にお祝いしてくださいよ。

大木　ああ……。

和子　でも、本当によかったですよ。麻子さんが朝鮮人だって明かされた時、多少の混乱はあったけど、みんな、受け入れて、以前と変わらないにように接していて。

大木　……。

和子　麻子さんがこの町内で信用を得てたからなんでしょうね。

大木　……。

和子　どうしました？

大木　いえ……。

和子　あっ！

友久と麻子が庭づたいに現れる。

友久　あれ、和子さん、どうしたの？

和子　二人をお祝いしたくて。

友久　わざわざ待っててくれたの？

和子　そうよ。りゑさんがいいお酒をくれたの。

麻子　ありがとうございます。

友久　大木さんもきてくれたんですか？

大木　ええ、まあ。

友久　ありがとうございます。

麻子　ありがとうございます。

大木　……。

麻子　……。

友久と麻子は居間に上がる。

和子は卓袱台に置いてあった一升瓶で友久と麻子、大木の枡に酒を注ぐ。和子の枡には友久が注ぐ。

友久　順平は？　あいつ、暇だろ？

和子　締め切り近くてそれどころじゃないって。

友久　ふうん。

和子　おめでとうございます！

順平・武晴・りゑ・次郎・喜久枝　おめでとうございます！

と、順平、武晴、りゑ、次郎、喜久枝が方々から現れる。全員、手に枡酒を持っている。驚く友久と麻子。

順平　えー、諸君！　私は満腔の熱誠をもって乾盃をいたしますっ。この祝盃は世間普通の場合のごとく単に一片の形式よりくるものではござりませぬ。新夫人は才学兼備の名媛、新良人は人格優秀の紳士、このお二人が新生涯に入り、円満幸福なる新家庭をつくられましたのは、まことに聯珠雙玉とも稱すべき、

和子　ちょっと早くしてよ。

順平　せっかく覚えたんだぞ。

和子　割愛しなさいよ。

順平　……諸君。私は同じ喜びを胸に懐かる満場の諸君と共に、茲に花嫁花婿の前途の益々多幸にして、天寿の萬歳ならんことを祈るが為に乾盃を致したいと思ふのであります。乾杯！

和子・武晴・りゑ・喜久枝・次郎　乾杯！

友久・麻子　乾杯……。

戸惑う友久と麻子を尻目に、順平、和子、武晴、りゑ、喜久枝、次郎は酒を飲み干し、拍手を送る。大木も拍手を送る。

順平　驚いただろ？

友久　ああ、びっくりしたよ。

喜久枝　無事に提出できたのね。
友久　うん。
喜久枝　お父さん、麻子さん、おめでとう。
友久　ああ。
麻子　ありがとう。
りゑ　麻子さん。
麻子　はい？
りゑ　木下麻子は通り名だったんでしょう？
麻子　はい。
りゑ　名前はどうするの？
麻子　敬愛（ギョンエ）は敬うと愛するで敬愛なんですよ。だから、敬子か愛子かにするので迷っています。
順平　麻ちゃんで慣れてるからな、麻ちゃんのままでいてほしいよ。
りゑ　そうだよね、でも、愛子だったら麻子と一文字違いだから、覚えやすそう。あや、あさこ、あいこ、あ行に縁があるね。
友久　（笑って）お酒、ありがとう。
りゑ　いいえ、お宅の職人さんが時々手伝いに来てくれるようになったから。
次郎　まさか本当にりゑさんのところにいくとは思いませんでしたよ。
武晴　こういうのは、一度経験してみた方がいいんだよ。
和子　経験してどうだったの？
武晴　俺は裁縫職人ひと筋だと思ってたんですけど、醤油屋もいけそうだなって思って。
りゑ　樽から一升瓶に醤油を注ぐ姿を見てやってくださいよ。
武晴　（樽から瓶に注ぐマイムをする）それそれそれそれっ！！
和子・喜久枝　よっ、大島屋っ！
武晴　今後ともどうぞご贔屓に。
りゑ　いいのよ、こういうやりとりは。今日の主役はこの二人なんだから。
喜久枝　りゑさんがやらせたんでしょ。
順平　友久、なんか話せよ。
友久　ああ、そうだな。

と、友久は立ち上がる。

友久　本日は、わたくし石崎友久と、妻、石崎、とりあえず、麻子のために、このようにお集まりいただきまして感謝しかありません。日本人と朝鮮人が結婚するという政府も奨励している内鮮融和を象徴する二人になれるよう、
大木　麻子さん、何を考えているんです？

それぞれが大木を見る。

順平　知ってるよ、麻子さんに従兄弟との縁談をもちかけようとしてるんだろ？　もう手遅れだぞ。
大木　従兄弟の件は、取りやめました。
順平　取りやめた？　じゃあ、なんだ、どうした？
大木　所詮は他人の僕が口出すべきではないし、そのままの方が幸福なのかもしれないとも思いました。
友久　……。
大木　でも、やはり石崎さんと麻子さんが結婚することが幸福なものになるとは到底思えないのです。この町内の皆さんに、

大木の話を遮るかのように麻子が立ち上がる。

大木　……。
麻子　皆さま、今日はお祝いしていただいてありがとうございます。それでは、私から感謝の気持ちを込めまして、私がこれまで生きてきた半生を皆様に語りたいと思います。

少しの沈黙。

麻子　釜山にいた頃、私は日本人の洋服店から独立した両親の店で働いていたのですが、そこにチェ・ヨンテクという男が店に通うようになり、私たちは恋仲になりました。
友久　……。
麻子　親日派の両親は私に日本人との縁談を望んでいて、ヨンテクとの結婚を認めてくれませんでした。ある日、失業したヨンテクが私に内地に行こうと持ちかけてきました。両親の許可など得られるわけもないので、私はヨンテクと駆け落ち同然で日本に渡ってきたんです。それが震災の起きる一年前、今から三年前のことです。
友久　……。
麻子　私は縫製工場で働いた後に、本所の洋服店で働くことになりました。ヨンテクは鉄工所や車引きなど職を転々としながら、日本でひと旗揚げて、両親に結婚を認めてもらうつもりでいましたが、現実は甘くはなく、日々の暮らしに精一杯なまま、時間は過ぎていきました。震災にあったのはそんな時でした。私は本所の洋服店で被災しました。
大木　……。
麻子　大きな揺れで店の天井が崩れ落ち、台所からは火の手があがり、私は店主と他の職人さんたちと一緒に逃げたのですが、私は彼らから離れ、ヨンテクが働く鉄工所へと向かいました。ヨンテクは日本語をそれほど理解できなかったので心配だったんです。人がひしめき混乱する中、運良く、私はヨン

テクと会うことができました。そしてヨンテクと一緒にいた工場仲間の朝鮮人同胞と本所の火災から逃れるべく上野公園へと避難したんです。そこで、一夜を明かしたのですが、翌日には朝鮮人が暴動を起こしているとの噂が公園内にも広がり、朝鮮人狩りが始まりました。私たちは上野の山を越えてこの町内へと逃げてきたのです。

順平　え？　この町内って言った？

麻子　はい。

順平　嘘だろ……。

麻子　この町内に入って、ちょうど神社の辺りに来た時でした。「鮮人がいるぞ！」と大きな声が聞こえ、声の方を見ると手に棒などを持った数人の男たちが私たちに向かって走ってきたのです。私たちは必死に逃げました。その際に私とヨンテクは彼らと離れてしまいました。

友久　……。

麻子　私とヨンテクはこの店の前の通りまで逃げてきたんです、私は人気のなかったこの店に入り、床中に散らばっていた生地を自分にかぶせて息を潜めました。ヨンテクも一緒にこの店に入ったと思いましたが気配がなく、通りをのぞくと、私を探すヨンテクの背中が見えたんです。でも、声をかけようにも怖さのせいで声が出せず、それでも振り絞って出た言葉が「ヨンテク、振り向いて」という日本語でした。そのせいか、私の声はヨンテクには届かず、不意に通りの脇から棒を持った男が現れ、ヨンテクの背中を思いきり打ちつけました。そして、次々と男たちが集まって、逃げるヨンテクの背中を棒や鳶口で打ち続け、ヨンテクは通りの突き当たりで倒れました。倒れたヨンテクに向かって誰かが刀を振り下ろしたところで、それ以上は見ていられず、この居間に上がり、倒れた箪笥から女物の着物を引っ張り出し着替え、庭づたいにこの家から出ていったんです。私は日本人を装いこの町から逃れました。

友久　……。

喜久枝　……。

麻子　この町に来ることができたのは震災から一年半以上経ってからでした。

友久　……。

麻子　あの時、ヨンテクを見捨てた私は、ヨンテクが殺されたのか、はっきり見たわけではありません。下宿先で待っていてもヨンテクが帰ってくることはありませんでした。でも、もしかしたら生きてどこかで働いているのかもしれないとこの町内を歩き回りましたが、そんなことはなく、ヨンテクが倒れた通りの突き当たりに来てみても、ヨンテクの着ていた白いシャツの切れ端が落ちているわけでもありませんでした。

りゑ　……。

麻子　ヨンテクに暴力をふるった男たちを探そうにも、あの時は薄暗く、私が見たのは男たちの後ろ姿だけだったので、この町の男たちを見たところで思い出すことはなにもありませんでした。

順平　……。
麻子　そして、私はこの石崎洋服店で働かせてもらうようになりました。というのが、私の半生、ではないですね、内地に来てからの出来事です。

長い沈黙。

麻子　私はヨンテクを皆さんが殺したことを認めていただきたいのです。
友久　……。
順平　……。
武晴　……。
次郎　……。
りゑ　なによ、こんな話、急にして、どういうつもりなの。
麻子　ヨンテクを皆さんが殺したことを認めてください。
りゑ　結婚して日本人になったからってなんでも言っていいと思ってるのね。
麻子　私はりゑさんが羨ましかったですよ。
りゑ　え？
麻子　悲しみを他の人にわかってもらえていて。
りゑ　……。
順平　お前は知ってたの？
友久　……。
順平　友久。
友久　……。
順平　友久っ。
友久　……知らないよ。
順平　麻ちゃん、そのヨンテクさんをやったのは他の町の自警団だよ、イキリ立った自警団は自分たちの町を離れて、町から町へ、朝鮮人を探し回ってたから。俺たちは朝鮮人を見もしなかったんだから。
麻子　この町内に来た時、私はこの店の前の通りにも来たんです。私が逃げ込んだこの店の前まで来て、中を見ると、玄関の戸に裁縫職人募集という紙が貼ってありました。喜久ちゃんがアイロンをかけていました。武晴さんがミシンを踏んでいました。親方が型紙を布に写していました。
友久　……。
麻子　親方の顔を見た時に、最初にヨンテクが棒で打ちつけられた情景が蘇り、もしかしたら……あの男は自警団のひとりだったかもしれないと思ったんです。
友久　……。
麻子　……。
順平　こいつじゃないよ、見間違え、
友久　俺だよ、俺がやったよ、朝鮮人を棒で殴りつけたよ。

長い沈黙。

麻子　……。

友久　……。

喜久枝　……。

順平　麻ちゃん、勘弁してくれよ、こんなのないよ、俺たちは後悔してるし反省もしてる。あんな状況だったんだ、仕方なかっただろ。なんだよ、俺たちが謝ればいいのか？

次郎　謝る必要なんてないですよ。

順平　……。

次郎　俺たちは警察と軍隊に踊らされただけじゃないですか。あいつらが朝鮮人が暴動を起こしてるって流言蜚語を撒き散らして虐殺を煽った、それに従っただけじゃありませんか、やりたくてやったんじゃない、この国を守るんだっていう使命感で、命を懸けて、やったんじゃないですか、俺は後悔なんてしてません。ただあの朝鮮人は気の毒だったなとは思います。

和子　気の毒だったなんてそんな言い方。

次郎　和子さんだって見て見ぬふりをしたじゃないですか。この界隈で知らないやつはいませんよ。朝鮮人の遺体は何日も通りの突き当たりで放置されたままになってたんだから。

和子　見て見ぬふりはしてない、我が国民は恥ずべきことをしたって雑誌に投稿した。

次郎　でも、ここでのことは書かなかったんでしょう？

和子　書けるわけないでしょ、家族を売る馬鹿がどこにいるっていうのよ。うちの亭主は殺したとは言わないけど、あれから深く眠れなくなった、それで、朝鮮人を殺したんだとわかった、何度も問い詰めてやろうとしたけどできなかった。だって、私も同罪、なにもしなかった、なにもできなかったんだから。

りゑ　麻子さん。

麻子　……。

りゑ　私が麻子さんだったら、その恋人を絶対に見捨てたりしなかった、絶対に背中を追いかけていった、そんなに日本語が話せるんだから、絶対に男たちを説得してみせた。

麻子　……。

りゑ　私たちは友さんにあなたが朝鮮人だと打ち明けられた時、誰も責めなかったじゃない、あなたの心情を思って受け入れてあげようって、みんなそうしたのに、何より友さんがかわいそう、求婚されて結婚した途端に、喜久ちゃんの前であんなことを告白しなきゃいけなくなって。

和子　そんなの麻子さんを責めるべきじゃないでしょう。

りゑ　責めていいのよ、私たちはだまされてたんだから、朝鮮人なのに日本人のフリをしてたんだから、麻子さんがこれまで話したことも全部嘘なのかも

しれないよ。
和子　本当にそう思ってるの？
りゑ　……。
喜久枝　私は本当に信じてたよ、うちの自警団は朝鮮人に会わなかった、朝鮮人を殺さなかったって。こんないい人たちがそんなことできるわけないって、お父さんがそんなことするわけないって。
友久　……。
喜久枝　でも、私にも罪がある気がする。
武晴　もうやめましょうよ、やってしまったことはそれぞれで抱えて生きていくしかないでしょ。麻ちゃんには悪いけど、次郎の言う通り、本当に気の毒としか言えないんだよ。あんな地震とあんな火事が起こってる最中で、誰も冷静にいられないでしょ。一部の過激な朝鮮人、おかしな朝鮮人が盗みに入ったり井戸に毒を入れたりしたせいで、悪い噂が立って、他の普通の朝鮮人も疑われることになったんだから。
大木　それは誤りです、政府は一部の朝鮮人が起こした暴動のせいだって発表してますけどね、あれを読むと、犯人と思われる朝鮮人の名前は記されてないし、事件も曖昧な書かれ方をしてる。政府の無理矢理の責任逃れですよ。
武晴　じゃあ、誰のせいですか？
次郎　佐伯さんのせいですよ、あの人が戦場にいるかのように俺たちを煽ったせいで、俺たちはやりすぎてしまったんだから。
武晴　お前は後悔してないの？
次郎　してませんって。武晴さんは？
武晴　……。
和子　震災で露呈したんだよ、文明国家なんて見せかけで、私たちはまだまだ野蛮人だってことが。私たちの精神的教養が足りないばかりに、あんな悲惨な事態を招いてしまった、冷静な考察力を持てずに残虐性を発揮してしまった、ここで麻子さんを責めて、私たちはなんの反省もすることなく、また同じことを繰り返すの？

少しの沈黙。

順平　俺たちはどうすればいいの？
麻子　はっきりとヨンテクを殺したと認めてください。
順平　認めて、それで？　自首すればいいの？
麻子　そうしてください。
順平　どうせ無罪放免になるのに？
麻子　それでも、そうしてください。
大木　金澤さん。
順平　え？
大木　今度の震災の日に朝鮮人暴動は間違いだったという訂正記事と僕の謝罪

文を載せます。
順平　……。
大木　必ずやりますから、その記事を読んだら、自分たちも間違っていたんだと罪を認めてください。
順平　……。
大木　お願いします。

長い沈黙。

喜久枝　復讐なら私を殺せば十分だったんじゃないの？
麻子　私が喜久ちゃんを殺したら、報復で別の朝鮮人が殺されるかもしれない。
喜久枝　お父さんと結婚する必要はあった？
麻子　私が朝鮮人のまま、ヨンテクの死を訴えて、皆さんに逆上されて朝鮮人のまま殺されてしまったら、なかったことにされるでしょう？
喜久枝　……。
麻子　でも、日本人になった私が殺されたら、なかったことにはできないでしょう？
喜久枝　……。

少しの沈黙。

麻子　ヨンテクを見捨てたあの時から、朝鮮語が話せなくなりました。「ヨンテク、振り向いて」と日本語で言ってしまった時から朝鮮語が話せなくなりました。もう朝鮮には帰れません。私はどうしたらいいんですか、私はどうしたらいいんですか。

友久が麻子に近づき、頭を下げる。

麻子　……。
友久　……。
麻子　……。
友久　ごめんなさい……。
麻子　……。
友久　ごめんなさい……。
麻子　……。

長い沈黙。

友久　……。
麻子　私は出ていきません。私はここにいます。ここで生活をしていきます。

私を見るたびに、皆さんはヨンテクのことを思い出すでしょうから。
友久　……。
麻子　私も、私が見捨てたヨンテクを思い出して……。

深い沈黙の中で、それぞれが麻子を見つめる時間があって、
暗転。

⑧

数日後。朝。
友久、麻子、喜久枝、次郎、武晴がご飯を食べている。
雰囲気からそれまでに会話がなかったことが伝わってくる。
黙々とご飯を食べる友久、麻子、喜久枝、武晴、次郎。
順平が庭づたいに現れる。順平を追いかけて和子も現れる。

順平　友久、武晴が借りようとしてた湯島の空き家がまだ空いてるんだよ、そっちへ移ってもらえないかな。先に麻ちゃんだけでも。
友久　は？
和子　ごめんね、すぐに連れて帰るから。
順平　朝鮮人が復讐を計画してるっていう噂が流れてるのはお前も知ってるだろ？　畳屋の放火の犯人も朝鮮人がやったって話だよ、武晴が背中切られたのも朝鮮人の飴売りが飴切り用のハサミで切ったんじゃないかって、だから警戒しようってことで、佐伯さんとも話して。
和子　まだ噂の段階でしょ！　警察の発表を待たなくてどうするのよ！
順平　あいつらのんびりしすぎなんだよ！　明日は震災の日なんだぞ！
麻子　私が何かするとでも思ってるんですか？
順平　悪いのは俺たちだよ、それは重々承知してるから。出ていってくれないかな。
麻子　お断りします。
順平　お互いもう気持ちよく暮らしていくのは無理だよ、離れて暮らした方が絶対いいから。
友久　お前、ふざけんな。
順平　お前だってもう元には戻れないのはわかってんだろ、装うなって。
友久　……。
和子　ほら、帰ろう！

佐伯が庭づたいに現れる。（大八車をひっぱってくる）

佐伯　うちの猫が死んだよ。

それぞれ、佐伯を見る。

佐伯　猫いらずを食べてさ、（麻子に）あんたが仕掛けたんだろ。

麻子　私じゃありません。

佐伯　そういう復讐をするんだね

麻子　私じゃありませんって。

武晴と次郎が立ち上がる。

武晴　……。

武晴と次郎は二階へと上がっていく。

麻子　え？

麻子は武晴と次郎を追いかけて、二階へ上がっていく。

友久　……。

次郎と武晴が麻子の荷物を持って下りてくる。麻子は止めようとするが、振り払われてしまい、倒れる。友久と和子が麻子に駆け寄る。喜久枝は呆然と見ているしかない。

次郎と武晴は、麻子の荷物を順平と佐伯に渡す、順平と佐伯は荷物を庭の外に止めてある大八車に乗せていく。

その後も次郎と武晴→順平と佐伯の流れで麻子の荷物が運ばれていく。

和子　警察、呼んでくるから！

次郎が風呂敷に包まれた木箱を持ってきて、順平に渡した時、

喜久枝　待って！　それ！

と、喜久枝が叫ぶ。出て行こうとしていた和子も立ち止まる。

順平　え？

喜久枝　順平さん、動かないで！！

順平　なんだよ。

喜久枝　そんなに乱暴に扱ったら爆発するから！

順平　え。

喜久枝　警察に届けたんじゃなかったの？
麻子　……。
喜久枝　届けるって言ったじゃん！
麻子　あの時はまだ朝鮮人だったんだから！
喜久枝　……。
麻子　私を疑うの？
喜久枝　……。
麻子　……。
順平　これ、なんだよ？
喜久枝　社会主義者の人が持ってきたの。
順平　え。
麻子　……。

武晴、次郎、佐伯が麻子に詰め寄っていく。麻子は逃げようとする。麻子を助けようと友久が加わっていき……暗転。

数十分後。
卓袱台や座布団などが散在し、乱闘の後を物語っている。
風呂敷に包まれた木箱が隅に置かれている。
麻子が階段に寄り掛かるように座っている。麻子は誰かに殴られたようで、顔が腫れ、唇が切れ、血が出ている。
大木とりゑがいて、呆然と居間を見ていたが散らかった物を元に戻していく。

大木　ひどいですね……。
りゑ　……。

友久が台所から現れる。友久も顔が腫れており、服が少し破れている。濡れた手拭いを持っている。

友久　あいつら興奮すると見境なくなるからな。
りゑ　大丈夫？
友久　俺は大丈夫。

友久は手拭いを麻子に差し出すが、麻子は受け取らない。

友久　……。
麻子　……。

大木は麻子のそばへ行く。

大木　すみません……明日の記事に僕の訂正記事と謝罪文は載せられません。
　どうしても聞き入れてもらえず……食い下がったんですが、最後は解雇さ
　れることになってしまって……すみませんでした……。
麻子　……。
大木　でも、今日のこの件は必ず記事にします、必ず記事にしますから。すぐ
　にどこかの新聞社に勤めなおして。
麻子　……。
大木　訂正記事と謝罪文もいつか必ず……。
麻子　……。

少しの沈黙。

友久　二人とも来てくれてありがとう。あとは俺がやるから。
りゑ　大丈夫？　まだこんな状態だけど。
友久　十分だよ。
りゑ　そう。
友久　うん。
りゑ　喜久ちゃんはうちにいるから。
友久　ああ、ありがとう。
りゑ　じゃあ、私は戻るね。
友久　うん。

りゑは去ろうとするが麻子を見て立ち止まる。

りゑ　……。
麻子　……。

りゑは去っていく。大木もりゑに続いて去っていく。
友久は隅に置かれていた風呂敷に包まれた木箱を慎重に持つ。

麻子　……。
友久　行こう。
麻子　……。
友久　あいつらには俺が警察に連れて行くって約束したから。
麻子　それは爆弾じゃありませんよ。
友久　え？
麻子　猫いらずです。私はその木箱を開けて確認したんですから。
友久　……なんで言わなかったの？
麻子　猫いらずだと言える状況じゃなかったでしょう。

友久　ああ……。
麻子　私はここにいます。
友久　こんなこととされて、ここにはいられないでしょう。
麻子　こんなこととされたから、いなきゃいけないんです。
友久　……。
麻子　私は日本人ですよ。
友久　……。
麻子　どうして私が出ていかなきゃいけないんですか。
友久　……。

友久は風呂敷に包まれた木箱を床に置く。

友久　……俺もいるよ、ここにいる。
麻子　……。
友久　明日も、明後日も、明々後日（しあさって）も。
麻子　……。
友久　……。
麻子　（苦笑する）
友久　ん？
麻子　……ヨンテクも同じことを言いました。
友久　……。
麻子　……。
友久　ヨンテクさんの遺体は俺が埋めたよ。
麻子　え？
友久　朝鮮人の暴動が嘘だって分かった時に、胸が張り裂けそうになって、放置されてた遺体を大八車に乗せて、神社の裏の林の、人目のつかないところに埋めた、せめてもの償いにお墓らしきものをつくった。
麻子　……。
友久　……。
麻子　……。

少しの沈黙。

麻子　連れていってください。
友久　え？
麻子　ヨンテクのところに連れていってください。
友久　……。

麻子は立ち上がる。

友久　……わかった。
麻子　……。

友久が振り向いたところで、麻子は隠し持っていた裁ち鋏を友久の背中に突きつける。

友久　え……。
麻子　私は初めからこうしたかっただけなのかもしれません。
友久　……。
麻子　ヨンテクと同じ目に合わせたかっただけなのかもしれません。
友久　……。
麻子　振り向かないでください。
友久　……。
麻子　このまま、ヨンテクのところまで私を連れていってください。
友久　……。
麻子　このまま振り返らずに私を信じてヨンテクのところまで行けますか？
友久　……。
麻子　行きましょう。
友久　……。
麻子　行きましょうよ。
友久　……。

友久はゆっくりと歩き始める。麻子は少し距離を空けて、裁ち鋏を突きつけたまま、ついていく。

友久　……。
麻子　……。
友久　……。
麻子　……。

麻子は途中で立ち止まって、友久の背中を見ている。

友久　……。
麻子　영택（ヨンテク）「ヨンテク」……。
友久　――。

友久は立ち止まる。

麻子　뒤돌아봐요（トウイトラバヨ）「振り向いて」……。

友久　……。

麻子は友久の背中を見つめたまま、友久が再び歩き始めて……、

暗転。

おわり